

「近代化の社会心理学」へ向けて

弘前大学人文学部 作 道 信 介

目次

はじめに一家出娘の“うそ”

I. 近代化とは何か

1. 近代化と意識—バーガーから

- 1) 社会的構築主義—自明性の構築と再構築
- 2) 近代化—担い手による「波及」
- 3) 工業生産と官僚制
- 4) 近代人のアイデンティティ
- 5) 卓見—ギデンズへ

2. 高度近代—ギデンズへ

- 1) 近代の制度的特性
- 2) 再帰的近代のアイデンティティ—語りと言説

3. バーガーとギデンズ

- 1) 波及から飽和へ
- 2) プロテストからポリティックスへ
- 3) 近代の基本的構図

II. 「近代化の社会心理学」へ向けて

1. ふたつの問い—アプローチと社会的位置取り

2. 社会心理学的アクセント

- 1) 社会心理学的立場
- 2) 事例：「パーソナリティ」の構築
- 3) 注釈：社会心理学的構築主義

III. 「近代化の社会心理学」素描

1. アプローチ—日常化とプロセス分析

2. 理論—“橋頭堡”として

3. 方法—フィールドワークという“前近代”

おわりに—ライフポリティックス

はじめに一家出娘の“うそ”^{注1)}

昭和32年2月深夜。青森県弘前市内の食料品店に中学生くらいの女兒がわずかに開いた戸から急に入ってきた。事情をきいたところ次のように言う。

黒石〔弘前市近郊〕からきたが、両親がなくおじさんのところにいる。しかし、中学2年までは通ったが、虐待されており、その後は学校へも行かされていない。どこかで使ってくれるところがないかと弘前に出てきたという。翌朝、民生委員を通じて児童相談所に連絡があり、保護し事情をきいた。実母は昭和31年の春、仕事での無理がたたリ、風邪をひき肝臓炎で花見前に死亡し、父親も2年間の入院の後、同年12月に死亡した。実母の死亡後、叔父夫婦に引き取られたが、叔父は本字宅の水田（5人役）を横取りした。叔父夫婦は本児をむかえて、「二人分働かねば、学校へやらないぞ」といった。叔父の子、悦子は不良学生で新聞に出たこともある。悦子は学校においても問題児で、警察にも何回となく呼ばれたこともあったが、叔父叔母はそれを知らなかった。叔母が本児にたずねたので、ぜんぶしゃべってしまった。それを悦子は否認した。叔母は悦子の肩をもち「このうそつき！」と本児につらくあたるようになった。悦子も本児を女中のごとくにこき使い、自分の洗濯物まで洗わせるばかりか、つねに「ここが汚い」ともう一度洗わせた。本児が帳面を買うためにお金をもらったりすると、悦子は金をとってしまい、ただの西洋紙を渡すのみであった。叔母から朝5時に起きてご飯をたくするようにいわれた。一日の仕事は朝5時起床、朝食後洗濯、夕方3時まで筵（むしろ）織り。豚の飼育。晩飯の支度もしなければならぬが、その間、叔母は本を読んだりしている。

事情をきいた係官は「本児は疲労のためかケースをとっているときしばしば眠りかけをしていたので、昼食後すぐ休ませる」と同情している。しかし、本児のいう学校に問い合わせたところ、同じ名前の生徒はいないが、ひとり昨日から行方不明の女兒がいて、それがその子ではないかという。果たしてその通りで、駆けつけた母親からわかった事情は次のとおりである。

両親とも健在だが、本児の弟と母親が入院したため、本児に学校を休ませて家事手伝いをさせていた。実母不在中叔母がきて面倒を見てくれたが、ふだん手伝ったことがない本児にとっては叔母に指図されるのが負担であり、家出し虚偽の供述をしたことが判明した。同胞は本児を頭に妹3人、弟ふたりである。電話局に勤める実父57歳の生い立ちは、小卒後、家が貧乏であったので借り子として他家へいき（昭和9年）、昭和18年に結婚、長女（本児）生後3日目でスマトラに出征、戦後は帰郷して、夫婦でりんご行商などをし、水田3反歩を借金で購入、その返済には「3年間飲まず食わずに過ごしたが、自分の財産だからと思ってがんばった」という。その後まもなく現在の電話局に入り、月収3万7千円^{注2)}。しかし、月収のうち2万近くを酒に使うため生活は苦しい。

昭和30年代の初め、学校へ行くことができず働かなければならない境遇がもはや空想の出来事に

なっている。もちろん、少女の話はまったくリアリティを欠いているわけではなく、むしろ当時としてはあってもおかしくない話^{注3)}であった。労働少年は戦前はもちろん戦後しばらくにおいてもとくにめずらしくはなかった。しかし、「学校にも行かせられず、家の仕事をさせられている」と訴えるということ、それは「そのような子どもの取り扱いが普通ではなく、第三者に訴えればその状況から抜けられる」という意識が少女にあったことを意味する。一部の例外をのぞけば、借り子、奉公に出て苦勞することを当然と考え、その苦勞を訴えたところでどうなるわけではなく、逃げ出せば家からもムラからもつながりが切れ、流れ者として零落していく“定め”を受け入れていた少女の父親世代とはまったく異質な感覚がある。

少女が児童相談所についてどの程度知っていたかはわからない。しかし、少なくとも少女の意識は三重に連動して新しい。自分を学校へいくべき子どもと定義し、それを働く子どもと対比し、制度に訴えた。養育関係と使役関係を区別し、さらに家庭を越えた制度を訴えるべき審級にすえている。別の言い方をすると、この少女は家庭のライフポリティックスに制度を利用し、複雑なかげひきを親や相談所の大人相手に行っていた。このケースは、戦後10数年で人びとの意識がいかに大きく変わったかということを示している。

少女が知らずに口にしていた養育と使役の関係は以前は一体となっていた。たとえば、柳田はのちに“人身売買”となる身売りについて「ある期間の労力を、他人に指揮せしめることをも身売りなどといった」とし、江戸時代、農家の年季奉公には付帯義務として「かねて定め年季が終わりになると、家を持たせまた女房の世話をし、ほんのわずかの作り高を下請けさせ、これを永代の子方とする」双方の同意があったという^{注4)}。

養育と使役関係の混在は第2次大戦後も引き続き残存した。昭和30年代に下北半島を調査した安倍^{注5)}は子どもを大工や美容見習いに出した父親が雇用者に恩やおかげの意識^{注6)}をもち、給料を謝絶しその分を自ら子どもに仕送りしたエピソードを紹介している。近代化にともなって、家庭や地域社会における子どもの位置に大きな変動が生じる。義務教育制度の浸透や教育機関、児童相談所をはじめとした厚生・保護機関の定着によって、子どもの社会化は、家庭や地域社会から学校を中心とした各種機関へ委ねられるようになっていく。養育と使役は教育と労働に分化していくのである。

日常生活の現実感覚と制度が定義する現実とはつねに隔たりがある。同じ論考で柳田は、昭和初期には棄児でさえ以前とは異なるニュアンスをもっていたと指摘している。

少し世の中が悪いとただでよいから養ってくれと頼む者が多くなり、なお不幸な人々は慈愛のありそうな門に棄児をした。日本の棄児は無条件に小児を委託するひとつの方式のようなもので、いまでも県によっては盛んに行われている。〈中略〉それを刑法で委棄罪と差別しないのは、やはりまた概念にとらわれた考え方で、かえって貫子殺しの秘話を数多くした形がある^{注7)}。

棄児は現在とは異なり、よく知った生活圏のなかで適切な預け先を選んで行われており、受け入れる側も委託されたとして養育していた。養子縁組といった制度的な対応が浸透すると、そのような選択が働かず、かえって弊害が生じたというのである。柳田は以前からある慣行にはそれを支える暗黙の前提があること、法律など制度の整備がその前提と抵触することがあり、ときに弊害をもたらすことを述べたのである。棄てる個人にとってみれば、委棄罪はそれまで自明視されてきた日常生活の前提を強制的に変えさせる力として現れる。

私たちは制度的な定義に対してただ従うだけではなく、ときに従順ときに抗いときに利用しつつ日常生活を円滑に営もうとする。少女のライフポリティックスは本人の思惑を越えたところで、30年後の私に、バーガーらのいう知識の構造（相談所の役割についての知識）、認知スタイル（訴えることにより公正な判断を受けることができる）、それらがよってたつ自明性の基盤である経験の地平が大きく変化したことを垣間見せたのである。

家出少女の記録は、17世紀以来大規模にゆるやかに進み、工業生産の飛躍的進歩、技術革新、交通機関の発達、マスメディアの発展、世界市場の成立により、ここにきてその速度をはやめた近代化という社会変動のなかで、私たちの意識構造がどのように変化してきたかという課題を提示する。近代化は家出少女が自明視する世界を変えるだけではない。さまざまな課題を設定しアプローチを行う私たち、研究者の社会的位置をも脱神秘化して、安易に研究の客観性を主張することを困難にする。そのような不可能性のなかで、私たちはどのようにアプローチを行うべきなのだろうか。

本論では、社会心理学的立場から、これら課題への対応を素描してみたい。この試みを「近代化の社会心理学」とよぶことにする。

1. 近代化とは何か

「近代化の社会心理学」は、近代という時代認識、近代化という大規模な社会変動のなかで、文化、社会、個人の関係を考える枠組みを提供するものである。近代は私たちの意識—学問的なまなざしのもとでは“心理”という言葉に縮約され、脱埋め込みされるものの、はるかな深さと広がりをもって外延する私たちの経験世界そのもの—にどのようなかたちをあたえているのか。私たちは自己や他者を身体を持った実在として世界に位置づける。近代において、それはどのようなやり方によってなされるのか。また、そのような私たちを研究する立場からどのように描き出すべきなのか。知識が再帰的に環流する高度近代において、研究するということはどのようにありえるのか。これらの反省的問いかけに一部でも応えようとするのが本論の目的である。

まず、近代化について、バーガーらの社会的構築主義をギデンズの近代認識のもとに整理することから始めよう。

1. 近代化と意識—バーガーら^{注8)}から

1) 社会的構築主義^{注9)}—自明性の構築と再構築

私たちは日常生活をとくに疑問なく、“つつがなく”送っている。ところが、ときに、私たちは「現実とは」と語り始めなければならないことがある。その「現実」は人を説得したり意志を決定す

る根拠となるという意味で一定の実効力をもつ。「現実」は「ときに」という例外をのぞけば私にとっては圧倒的な自明性をもってそこにある。しかし、バーガーらによれば、いかに自明性をもって現れたとしても、現実とは特定の社会的歴史的条件のもとに構築された暫定的な現実にはすぎない。いかにこの自明性が維持されているか。これが社会的構築主義といわれるバーガーらの立場が問うところである。私たちは多くの多様な人びとと日々交わる。自明の現実はそのような言語を介した^{注10)}社会的相互作用過程を通じて創りだされていく。反対の見方をすると、私たちがつくる現実はずねに異質な現実を自明視する他者からの働きかけによって危うくされることになる。主観的現実を維持するには、特定の社会的基盤と社会的過程からなる「妥当性構造」^{注11)}を必要とする。私たちは妥当性構造を介して、重要な他者との会話によって、自己の正当性やアイデンティティを確認し、主観的現実を維持するのである。このいま便宜的に「主観的」と名づけた現実とは唯我的現実ではない。言語による媒介によって制度と結びつけられるべく、かたちを整え容貌を現しつつある、間主観性へ向けて開きつつある現実である。以下、「客観」と「主観」はつねにこのような関係にある。

相互作用過程は、制度にみられる客観的現実定義と個々の経験に根ざした主観的現実定義が会う場である。現実とは両者の弁証法的出会いのなかで構築・維持されると同時に、変革される可能性をも得るのである。近年の社会的構築主義においては、いかに社会的現実が構築されてきたか、その過程分析が盛んに行われている。中心は言説分析にある^{注12)}。しかし、バーガーらは構築されてあるものの解体、すなわち脱構築の可能性を示しただけではなく、新しい社会的現実を提示すること、現実の構築にも力点を置いていたのである^{注13)}。

2) 近代化一担い手による「波及」

バーガーらの『故郷喪失者』を中心にその近代化論、近代認識を概観する。本書におけるバーガーらの関心は副題「近代化と意識」そのままに、近代社会の制度化過程とそれに伴う私たちの意識の変化にある。制度化は、工業技術により誘導された経済成長に付随して特定の布置をもつ^{注14)}。意識とは、日常生活において生じる出来事や困難をうまく切り抜けさせてくれるような意味の網の目である。分析的には、意識は体制化された知識と認知スタイル、特定の知識が依存する包括的な現実定義である全体的準拠枠（地平）からなる^{注15)}。これらがバーガーらの分析道具である。

バーガーらはフッサールの現象学的伝統を背景に展開されたシュッツの生活世界論をもとにしている。すなわち、私たちの経験意識は、つねに～についての意識であるが、対象は「規定可能な無規定性としての地平」から現れる。個別具体的な、結果として客観性をもって現れる対象はすでに「先行的枠取り」によって「あらかじめ輪郭を描」かれている。「対象の規定作用とともにつねに規定の可能性を導く先行的な枠組みが設定され、新しい現出への移行に規則を与えている」。現出と同時にそれはより特定の「意味の枠」のなかで解釈される^{注16)}。

意識は孤独な主観によって経験されるのではない。間主観的な世界の構成について、バーガーらは象徴的相互作用論によっている。したがって、近代化の過程であれ制度の形成であれ、基本的に二者間の対面的相互作用から出発して一般化された他者との相互作用への移行を基盤に説明される。

たとえば、近代化はパッケージの伝播の過程、「波及」^{注17)}である。パッケージとは「制度的過程と意識群との経験的に確かめうる結合」であり、これが制度的過程や集団の担い手によって波及し、さきの意識の連関パターンを変えていく。～から～へという出発と終着を概念的であれ指定する、いわばピリヤード型の伝播過程である。また、彼らは担い手carrierを第1次的担い手と第2次的担い手とにわけている。第1次的担い手は工業生産や官僚制度に直接関連する諸制度や社会的過程であり、第2次的担い手は教育機関やマスメディアである。しかし、その分析の中心は第1次的な担い手にあることに留意する。

3) 工業生産と官僚制

『故郷喪失者』では、意識のありかたに影響を及ぼす2つの制度的過程—工業生産と官僚制—があげられている。以下、要約してみよう。^{注18)}

工業生産が意識の連関におよぼした影響については多くのことがあげられている。工業生産に従事することは、知識としては「仕事の工程が機械のように機能的で、個々の労働者の活動が機械的工程の本質的な一部分として結合している」という機械性、自分でなくても同じ仕事をできる人はいくらもいるという代替可能性を知ることである。認知スタイルとして労働現場で必要とされるのは、たとえば感情の管理（感情の発露は労働場面では抑制しなければならない）、最大化の前提（効率を最大にしようとする）、多相関化（いろいろなことが同時に起こっている）などがあげられる。また、人間関係を匿名的なものとして認知することがあたりまえになる。それは「逆に、他人との直接的な対面関係（たとえば友人、家族、近隣者との）を超越できないことは、その種の産業に従事していることに基づく障害であるばかりでなく、広いレベルでの社会参加や社会移動を行うための、足枷となる」ほどである。

なかでも重要なのは「寄木細工性」componentialityの意識への波及である。すなわち、「現実を構成する要素は互いに関連しあうことのできる、類似した、ある自足的な単位であると考えられる。現実とは唯一の実在の休みなき結合と分離の流れであるとは考えられない」。寄木細工的な認知スタイルの獲得により、因果関係、時間、空間からなる現実とは分解可能な構成分子として現れ、別なかたちに再構成することが可能になりうる。それは個人が自己を規定するやり方そのものにまで影響する。自己は「寄木細工的自己」a componential selfと化すわけである。バーガーらは次のようにまとめている。

このようにして、寄木細工性という、テクノロジカルな生産工程に内在的な基本的特質が、社会関係の領域だけではなく、個人が自己のアイデンティティを規定し体験する内面的な主題の領域まで波及する^{注19)}

官僚制も特色ある認知スタイルを植えつける。それは全生活領域を覆う網羅性をもつが、個々の“窓口”は指定された生活領域にのみ権限をもつ、“窓口”の連関は照会によって理解されるという意識構造をつくりだす。また、私たちは官僚制にふれることで、「社会」そのものを意識する。社会

は組織されねばならない無定形の現実として経験される。社会概念が植えつけられるのである。問題は多い。しかし、分類すれば操作可能である。したがって、とりあえず分類することで解決という、“官僚的” 保守的な認知スタイルが形成される。人権が官僚的に規定しうる権利に関連づけられているという考えやある官僚機関はつねにある特定の人権について責任があり、つねに不平を訴える相手がいるはずという思いも私たちが制度に抱く意識の特徴である。冒頭の家出少女はすでにこの意識をもっていた。

バーガーらは近代化のエージェントとして軍隊を例にひいている。軍隊は、手柄をあげれば昇進する競争社会である。多くの規律や官僚的手続き、品質のよい製品や栄養価の高い食品。軍隊は集約的な近代化の場^{注20)}である。

4) 近代人のアイデンティティ

バーガーらは近代人のアイデンティティの特色をつぎのようにまとめている。近代人は将来への計画、生活歴設計 (life plan) によってアイデンティティの感覚を得ている。何をするかだけではなく何になるかを計画し、将来の計画による特殊な時間性とスケールの大きな空間性をもっている。アイデンティティは異様に確定せず開かれており、他者からの定義に敏感である。また、生活世界の複数化に対応して細分化し、異様に自己反省的である。個人の計画決定の自由が標榜され、その意味で個人主義的である。

一方で、近代化は結果としてアイデンティティが安定的に維持される生活世界を駆逐してしまう。近代人は世界は生きるに足るものであるという「基本的信頼」を再構築する場所をさがし続けなければならない。近代では、「まとまりのある、疑う余地のないホームワールドをもったことがない人間」、「故郷喪失者」が見い出されることになる。バーガーらは、1960年代の青年文化や対抗文化を脱近代化の例としてとらえる。アイデンティティは制度的世界へ対抗するなかで確認される。

近代人のアイデンティティに関するバーガーらの議論は制度化 (近代化) された世界と対抗文化 (脱近代化) の世界とを二極対照させて進む。いずれも前提としてあるのは広告やマスメディアの役割に言及しつつも、第1次的担い手における対面的な相互作用を基盤に影響関係をとらえる視点である。言及された例からすると、彼らは、軍隊や工業生産現場あるいは対抗文化の集団といった、可視的な社会組織や運動を念頭に置いているようである。このような視点に立つと、アイデンティティの確立は制度や組織、集団への適応、反発、無視といった単純なプロセスに整理されてしまう。しかし、対抗文化内においても現実定義をめぐって相互作用がおこなわれており、ときに優勢な定義が個々のメンバーのアイデンティティにとって抑圧的に働く場合もある。制度をめぐって私たちがおこなう相互作用の実践はこのような複雑な実相をもっている。また、近年顕著な社会運動は第2次的担い手—マスメディア、インターネット—の大きな影響のなかで形成されている。ヒールズとウッドヘッドはバーガー以後私たちの世界が二極どちらの世界にも陥らなかった要因のひとつとして、第2次的制度の発達による人間関係の形成が「中間の道」middle wayとして働いた点を指摘している^{注21)}。

5) 卓見—ギデンズへ

しかし、彼らが脱近代化の運動について次のような卓見を示していることは指摘しておかなければならない。バーガーらは、脱近代化において形成されるアイデンティティが制度から離脱した真実の自分を獲得することで得られると指摘しながら、一方で、それが内包する矛盾に気づいている。「近代意識に基づく現実定義やその心理的影響は、それに対する反抗の中にさえ引きずって行かれ、近代性への攻撃を、その同じ近代性を前提とした意識を持つ者が行っているという、皮肉な光景」^{注22)}を見る。「脱近代化とは、(知識や認知スタイルからなる)『パッケージ』をばらばらにして、脱近代を志向する者のイデオロギーに基づいて、あれこれの方法でそれらを新しく再構成すること」^{注23)}である。再構成に用いられる部品はすでに近代化のなかで切り出されたそれなのである。結局、機能的な立場からは、脱近代化は「社会的階層移動を容易にすることによって、脱近代化が反抗の対象としている近代的社会構造の、ヴァイタリティを強化する役目を、間接的にはたすのである」。^{注24)}この指摘には近代の再帰性を認識する萌芽がある。

近代社会では、対抗文化は「カウンター・カルチャー」とカタカナ書きされ、ひとつの商品的ブランドとして生産・流通する。「インディーズ」とよばれるレコード会社、「無印」とよばれる商品ブランドはあたかも対抗文化の反骨を骨抜きにするかのように受け入れられていく。対抗文化は陳腐に流通し、現実を鋭く切り取る構図の思いがけなさを失って死喰になってしまう。ギデンズを先取すれば、近代化はつねに現実を枠づけ、自らの補集合をつくり統合しようとする制度的働きかけである。制度的働きかけ—近代の再帰性—は、ときに集団や組織、世代といった可視的な境界を固定し、ときに形骸化するように働く。バーガーらが描いた近代社会の特徴をより徹底化したところにギデンズの高度近代がある。ここでは、バーガーらの近代においては、社会集団や組織はエージェントして、輪郭のはっきりした近代化の波及源としてあり、専門家は素人よりも知識をもち、個人は他者、集団は外界との境界を明確にもっていることに留意する。

2. 高度近代—ギデンズ^{注25)}へ

近代はそれ以前の伝統的社会秩序とは変動の速さ、変動の拡がり、近代的制度の本質において非連続である。しかし、ギデンズは近代がその先のポストモダン（近代以後）という新しい段階へ移行したとは考えない。ポストモダンではなく、これまで近代の特色といわれてきた要素がいっそう徹底的大規模に浸透する高度近代high modernityとして描く。1960-70年代にバーガーらが指摘した近代化の諸問題はギデンズの高度近代に通底する。

1) 近代の制度的特性

ギデンズは近代の制度的特性を相互に関連する次の3点にまとめている。時間と空間の分離、脱埋め込みメカニズムの発達、知識の再帰的専有である。

(1) 時間と空間の分離と脱埋め込みメカニズムの発達

スケジュール帳は私たちの生活に不可欠であるが、そこで行っているのは、「いつ、どこで、誰と」を調整することである。水曜日の学生会館での面会を金曜日のカフェテラスに変更することを平気

でおこなう。そのとき、時間と空間は分離され入れ替えられたのである。

脱埋め込みメカニズムはバーガーらのいう寄木細工性の一層の徹底である。自明である日常生活の現実から特定の主題にもとづく関係が切り出される。「社会関係を相互行為の局所的な脈絡から『引き離し』、時空間の無限の拡がりのなかに再構築する」^{注26)}。それは再埋め込みされる。「脱埋め込みを達成した社会関係が、(いかに局所的な、あるいは一時的なかたちのものであっても) 時間的・空間的に限定された状況のなかで、再度充当利用されたり作りなおされていく」^{注27)}。

この脱埋め込み—再埋め込みを可能にする条件は、貨幣を典型とする象徴的トークンと専門家システムの確立である。象徴的トークンとは「それを手にする個人や集団の特性にかかわらず「流通」できる、相互交換の媒体をいう」。専門家システムとは「われわれが今日暮らしている物質的・社会的環境の広大な領域を体系づけている、科学技術上の成果や職業上の専門家知識の体系のことをいう」^{注28)}。例をあげてみよう。「りんご5つとみかん2つを足すといくつ？」という問いに答えるには何が必要なのかを考える。7つが正解だが、りんごとみかんを足すには数という抽象概念が必要である。また、時期的にも地理的にも異なる果実の取引には、象徴的トークンである貨幣とそれを支える専門家、商人、金貸しが必要となる。

(2) 知識の再帰的専有—「心理学化」を例にして

脱埋め込み化されるのは事物だけではない。社会の「心理学化」を例にあげよう。すでにバーガーらは「心理学化」をとりあげていた^{注29)}。心理学理論が日常生活に浸透し個人に内在化されるにつれて、それは実現力をもつようになる。内在化は外在化と不可分な社会的過程にあるからである。日本において社会的影響力のある事件に関して被害者の心のケアがいわれるようになったのは阪神淡路大震災以降といわれる。以前は“心の問題”がなかったというのではない。個人的な問題として各自がとりくむ領域にあって社会化されていなかっただけである。ギデンズに即して見取れば、心理(学理論)という抽象的トークン、それを支える専門家システムによって、“心”が脱埋め込みされたということになる。

“心の問題”にとりくむ専門家は、自身で設定した問題にとりくむという事態にある。ギデンズは学問的知識の再帰性として次のように述べている。

モダニティの再帰性は、体系的な自己認識が絶えず生成されていくことと直接関係しているため、専門家の知識と一般の人びとが行為の際に用いる知識との関係を固定化しない。専門的観察者の求める知識は(何らかに、また多様なかたちで)その認識対象と再び一体化し、それによって(原理的にも、また通常実際にも)その認識対象を変えていく^{注33)}。

対照的に、無文字伝統社会においては“心”は重要ではない。菅原^{注30)}はブッシュマンの会話分析で、形式的な会話のなかから“心”が立ち現れる一瞬をとらえている。交渉における形式化の卓越した会話では相手の出方がかなり予測可能である。相手の考えを先取りし、相手の“心”を忖度(そんたく)することができる。菅原は「インタラクションの形式化において初めて、心は、参与者

の内部にその像を結ぶ」^{注31)}という。しかし、だからといって相手とのやりとりにおいて参与者の考えが変わるということはなく、「明瞭な初期値の輪郭を保持したまま、ただ外化され聞き手の耳にとどく」^{注32)}。“心”は形式化された相互作用に宿るが、実践を前もって規制する実効的な根拠としては用いられていない。

近代は再帰性が際限なく働く社会であり、社会システムの再生産の際に再帰的に用いられる知識は、その知識が最初に論及していった状況を内在的に作り変えていく。脱埋め込みされた知識や認知構造はいわばパッケージとして流通・波及するだけではなく、源の思惑を越えて源にもどっていく。流通・波及は専門家と非専門家の境界をあいまいにし、これまでになかった“専門家”を生み出しもする。事情は医療において顕著である。医療化が進むにつれて、医療が担当すべき“病気”の領域は拡がり、“健康”までを対象とする。これは一見医療の隆盛を物語るようだが、反面医療が実際に治せる病気が減少することを意味する。そのため、“素人治療者”はもとより、医療専門家からも代替医療が提案される。患者は自分たちの治療をうけるため自助グループをつくる。現在では、伝統医療をはじめ健康維持や病気対処にかかわるエージェントは多岐にわたり、まさに「多元的なヘルス・ケア・システム」^{注34)}を構築している。医療化は医療の社会的権限を増大させるが、一方で、実効力を衰退させ脱医療化を促す。

2) 再帰的近代のアイデンティティ語りと言説

再帰性を特徴とする近代認識において、私たちのアイデンティティはいっそう不安定な状況におかれる。バーガーらの認識においては、少なくとも対抗文化においてアイデンティティは依り所をもつことができる。しかし、再帰的近代においては、大人文化—対抗文化といった区分自体が誰によってどのように引かれたかが重要な問題となる。ある事件が大人対青年の世代間のいさかいと定義され切り出されるとする。それについてマス・メディアから、「アイデンティティ」による説明がなされたとしよう。説明はひとつの有力な見方として流布し、青年自身によっても自己解釈のひとつとして意識される。たしかに状況はわかりやすくなる。しかし、いさかきの意味は陳腐化する。いさかいにかかわった個々の成員にとっては問題へのかかわりの多様性を奪うように働くかもしれない。この場合、アイデンティティ概念によって、いさかきを大人対青年の対立というありそうな図式に還元すること、原因を青年の内面へ、「アイデンティティ」へ帰属すること、これらは大人側のポリティックスの勝利ともいえるのである。「結局、君らは自分探しをしているのだよ」、というわけである。現実のいさかい場面への関心が奪われてしまう。さらに再帰性はここで述べた解説さえ、ひとつの言説として流通させる。専門家の解説をふまえたうえで、問題が語られる。ついには、再帰性自体が意識されるにいたる。結局、問題はさまざまに定義され、いったん優勢な定義がなされてもそれをめぐるつねに“メタ”の定義がなされるという状態である。状況の定義さえ一義的に決定されないなかで、私たちが自己が何であるかということを確定するカテゴリーもまた決定されえない。ガーゲン^{注36)}が『浸透された自己』において、他者の声によって浸透されているといったのはこの状況である。

このような状況において、アイデンティティは語られることによって自己言及的に確認されるほかない^{注35)}。バーガーも社会的現実を確認し自明視するにあたって会話の重要性を述べていた。ギデンズは、世界に生きることはディレンマに生きることであり、このディレンマは自己アイデンティティの一貫した語りを保持するために解決されねばならないとする。次のように言う。

自己の統一の問題は近代がもたらした激しく広範囲に及ぶ変化に直面して、自己アイデンティティの語りを守り再構成することに関わっている^{注37)}

語ることによって確認されるアイデンティティは語るべき他者を必要とする。しかし、他者との直接的な交わりを必要としない。たとえばアウトドア・ライフの雑誌の読者はアウトドア・ライフを共にする「想像の共同体」^{注38)}のなかで話している。プラマーは『セクシュアル・ストーリーの時代』において次のように言う。

ストーリーは、さまざまなコンテキストでいろいろと語られ、読まれる。ひとつの話を消費することは、さまざまな社会的世界と解釈共同体を軸にしており、そこではほかとは異なる独特なストーリーの聞き方があり、自分たちで「記憶」を共有するようになることがある^{注39)}。

ライフスタイルは自己アイデンティティの特定の語りに形態をあたえ、言説として流通させる。このような語りによるアイデンティティの確認という状況^{注40)}は、提示されたライフスタイルと同様、陳腐化・類型化され、生き生きとした体験を伝えることができなくなってしまう。しかし、反面、語りによる新しい現実の構築を成し遂げる可能性も同時に得るのである。ここでギデンズから離れて、語りと言説を操作的に分けておくのが適切である。言語とは、流通する語りのスタイル、ストーリー—それは語る本人にもなかなか気づかれない定型化された語り—であり、そのような言説から逃れることはできないにせよ、自分の体験を伝えようとして発せられる声が語りである。臨床家が耳をかたむけるのはこの語りである。もちろん、近代においては両者を厳密に分けることはできない。語りはたちまち言説化される。語り手は自己の代替不能な体験を解釈共同体に差し出す代わりに、言説化の危険にさらされる。しかし、言説は語り化もされる。体験者が語るその現場、そこに臨在する私たちにとって、語りは直接的に響く。自己の体験を語ろうとする運動、言説に支配されつつも自己の表現を見つけようとする運動のなかで、語りは姿を現すのである。

アイデンティティは語ることにより再構築されつづける。語りの変化はアイデンティティの変化でもある。支配的な言説がありそれが制度を支えているとしても、それに対抗する運動は必然的に新しい言説の産出を伴う。レイプの被害者を生き残り者（サバイバー）とよぶ、ホモ・セクシャルをゲイとよぶ、このような語り方をめぐる政治的働きかけが運動の主流となっていく^{注41)}。たとえば、がんという病気とのつきあいをつうじて医療や代替医療、患者、家族をめぐる体験を書き、がん患者というアイデンティティを主張するようになることも同様である。がん患者は治験に参加し政治的に働きかけることで、新薬の製造認可にまでいきつく^{注42)}。語りは対面的に語られると同時に、

雑誌やテレビなどのメディアを通じて流通し、再び個々人に内面化されていく。アイデンティティは言説によるライフポリティックス^{注43)}のなかで確立される。この構図は、時間と空間に限定された共同体やコミュニティに基づいたアイデンティティからマスメディアをつうじて形成されるつながりに基づいたアイデンティティへの移行を示している。ギデンズは自助グループやNPOといったつながりにエンパワメントの可能性を見る^{注44)}。

3. バーガーとギデンズ

1) 波及から飽和へ

『日常生活の構成は』制度化を論ずるにあたって、無人島の二人のエピソードから始めている^{注45)}。両者のやりとりがパターン化され、制度が形成される。バーガーの説明には最小の原初的ユニットから全体を考える傾向がある。近代化の意識構造への影響を論じるにあっても、工業生産や官僚制における具体的なエージェントからの「波及」によって説明したのはすでに述べたとおりである。一方、ギデンズは近代の3つの制度的特性から始める。近代は「脱埋め込みを遂げた制度」によって、私たちの経験世界を脱埋め込み―再埋め込みの運動に組み込もうとする。高度近代制度の3つの特性は、さらに近代の4つの制度的次元のグローバル化の結果もたらされ、徹底される。すなわち、3特性は、国民国家における、資本主義、産業主義、監視、暴力という4次元に基づく。この4次元は、世界資本主義システム、国際分業システム、国民国家システム、世界軍事秩序へとシフトし、世界システムを形成する。

バーガーらは近代化を限定されたエージェントによる波及と考えた。工業生産や官僚制に代表される現実定義が、具体的なエージェントを介した相互作用過程によって個人の現実構築とせめぎあう。そのような現実をあたりまえとして私に接する他者によって、現実構築は影響される。バーガーらが、近代化によって波及するとした「寄木細工性」や「社会の網羅性」などは、ギデンズがいう時空の分離や脱埋め込みによって縮約され、たんに「波及」するのではなく、再帰的に専有される（あふれだす）。さらに、これら制度的特性は、その背後に国民国家、さらにグローバル化した秩序と連動してあらわれる。近代化の影響は点から点へ伝わるのではなく、私たちの生活を広範に飲み込んで環流するのである。制度的ダイナミズムに気がつかなければ、知識や情報がパターン化され、飽和したように見えるほどである。

両者の違いは、太田が報告したケニア・トゥルカナにおける道路工事の影響〔本論注6〕を例にするとよくわかる。牧畜民が突然始まった道路工事に雇われ、道路の伸長とともに労働現場を移動しつつ、「時間労働」の概念を意識化していったとしよう。これはバーガーのいう近代化である。しかし、「時間労働」を内面化したトゥルカナがこの社会で成功を納めることは望めない。道路工事は一時的であり、他に彼を雇う先はない。たとえ、何らかの技能―車の簡単な修理や帳簿のつけ方を身につけていたとしても、彼にはもとの牧畜生活に戻るほかに選択肢はない。もし、雇用期間中、牧畜管理をなおざりにしていたとしたら、回復に何年もかかるだろう。途上国への援助の難しさは点と点を結ぶ近代化をベースにしているところにある。一方、ギデンズの高度近代では、「時間労働」

の概念は生まれたときから身近な養育者を担い手に繰り返し植えつけられる。学校教育やアルバイトなど予期的な社会化を通じて準備される。「時間労働」の概念は高度近代の制度のなかでキャリアを紡ぐ上で、とりたてて意識されないほど、基礎的な意識のあり方である。このような国家レベルのによる制度的な働きかけに組み入れられてはじめて、「時間労働」は個人の意識に埋め込まれるのである。

2) プロテストからポリティックスへ

ショーターは、合衆国の1960年-70年代初頭と現在を対比して、人間としての扱い求めるポリティックス politics of personhood から、アイデンティティと帰属のポリティックス politics of identity and belonging への変化としてまとめている。

当時、私たちがわからなかったのは、言葉のもつ、現実を形成し人と人とを事象と事象とを結びつける力 formative and relational であり、それはミルズが1940年にすでに「多様な社会的な行為を調整し位置づける社会的機能」とよんだ力である。権力の一元的な階層モデルのなかで、私たちはまずすべきはプロテストであると考えていた。権力にいる人びとに、権力の機械的で非人間的なやり方がいかに間違っているかを見せることだと考えていた。私たちはまた、私たちのおしゃべり talk の力をわかっていなかった。おしゃべりはレインが『家政の政治学』などで用いた“政治的な”特質をもっていたのに。新鮮な語り口、議論の新しい進め方は、おしゃべりの背後にある実体を単純に反映するというよりむしろ、それら実体を創り発明する働きをするという事実をわかっていなかった。

上記指摘は、バーガーらからギデンズへの変化をうまく表現している。プロテストの対象だった権力は、特定の機関や制度の窓口といった物象化された実体に宿るのではなく—ときに直接的に行使されるにしても—、私たち自身の言説にある。言説は日常生活を方向づけるとともに、私たちにも新たな現実を構築する機会をあたえる。社会的影響力の分析は言説へと向かうわけである。バーガーらも会話の重要性は十分に認めていたが、近代化論においては、波及される知識や認知スタイルを論じるにとどまっていた。

言説という点からながめると、高度近代に生きる個人について、次のような見立てが成立する。制度の脱埋め込みメカニズムは個人にとっては語りの言説化として作用する。社会的影響力は第1次的・第2次的担い手との相互作用過程において、言説を通じて個人の現実構築に関わる。近代制度のグローバル化に支えられた脱埋め込みや知識の再帰性が言説レベルで作用し、現実の構築を方向づける。構築される現実とは、バーガーらが工業生産や官僚制度がもたらすとした特徴、より包括的には、ギデンズのいう、時空の分離、脱埋め込み、再帰性からなる制度によって支えられた現実なのである。近代化の大きな運動のなかで、私たちは、言説—語りによって自己の居場所をもとめる。それは自己アイデンティティをめぐるライフポリティックス^(注46)である。バーガーらが指摘した、客観的現実定義と主観的現実定義のせめぎあいや近代化の意識構造への波及は、制度の中の個人の

言説的なせめぎあいとして分析可能となる。

再び医療化を例にとろう。多様な言説が流通するが、医療言説はそのなかでとくに正当性をもって現れる。科学的正当性をもつだけでなく、私たちが自らの実践の正しさの尺度として日常的に用いられるという意味で、医療言説は支配的な言説である。私たちの病気対処はこの支配的な言説を軸におこなわれる。しかし、私たちはただ医療言説に従うだけではない。それまでの生活史的知識や自己観察をふまえ、病気の意味づけ、展望、治療実践などを含む病気の現実構築をおこなう。その実践は、ときには医学的にひどく逸脱しているように見え、素人療法と非難される。反対に、一見医療言説に従っていても、医療側の期待とは全く異なる現実のなかで実践している場合もある。いずれにせよ、病気対処は医療の規準から逸脱するおそれがある。このような私たちの病気対処は、つねに医療言説という優勢な言説に対して、自己の体験や知識、他のエージェントの働きかけをもとに、病気の現実を構築するプロセスである。この実践は、優勢な医療言説に対する抵抗や回避、融合として描くことができよう。ここまで近代の諸力を確認して、私たちはそこで生きる私たちの営みを描く視点を手に入れたのである。

バーガーらの近代化論は限定的である。しかし、実証的研究を念頭においた場合、社会的現実を構築されたものと見なす彼らの立場は依然として、近代化を前提としたアプローチの唯一である。正確に言えば、その後バーガーらとの系譜を標榜する社会的構築主義的アプローチを指す。たとえば、中河^{注47)}は、「社会問題への構築主義アプローチ」を（１）言説が生まれるその場面の分析、（２）特定の制度的場面での構築過程へのエスノグラフィー的分析、（３）複数の場面を横断しての構築過程、（４）言説の歴史的変遷の４つの水準にまとめている。これらのアプローチは、社会心理学的な力点移動をへて、本論のめざす「近代化の社会心理学」においても適用することができる。ただし、再帰的近代の常として、次の２点に留意しておく。社会的構築という立場自体、パーソンズなどの社会をシステムとして考え、社会を統制する立場への一社会学的主潮への一プロテストとして構築されたこと、社会が構築されるという立場こそが、きわめて高度近代的である一高度近代の一部をなしている一ことである。

３）近代の基本的構図

私たちが描くべき近代の基本的な構図は次のようである。

（１）高度近代の制度的な働きかけ

a.高度近代は、私たちの現実を一定の方向性をもって制度化するように働きかける。ギデンズは高度近代制度の特性を時間と空間の分離、脱埋め込みメカニズムの発達、知識の再帰的専有にまとめている。近代は「脱埋め込みを遂げた制度」によって、私たちの経験世界を脱埋め込み・再埋め込みの運動に組み込む。バーガーらは、近代化によって、「寄木細工性」、「社会の網羅性」といった知識や認知スタイルが、工業生産や官僚制によって「波及」と指摘した。ギデンズによれば、自然に分節された生活世界の多元的構造が、「労働」や「社会」という象徴的トークンによる脱・再埋め込み運動によって、より自覚的に多元化された結果である。

b. しかも、この働きかけは擬人化された制度や制度担当者が意図的に行うものではない。高度近代の制度的特性は、近代の4つの制度的次元—資本主義、産業主義、監視、暴力—がグローバル化された結果、徹底される。すなわち、国民国家における4つの次元は、世界資本主義システム、国際分業システム、国民国家システム、世界軍事秩序へとシフトし、世界システムを形成する。

(2) 高度近代におけるポリティックス

a. ポリティックス

このような近代における私たちを描く構図は、制度的働きかけのなかでのポリティックスである。1960年代、バーガーらは制度へのプロテストをアイデンティティ確立の例としてあげたが、高度近代では制度は対決すべき対象ではない。日常的に実践を通じて私たちに働きかける力である。私たちは制度に対してプロテストするのではなく、制度に乗ってポリティックスをめぐる。

b. 支配的言説＝制度的働きかけ

制度的働きかけは相互作用過程を通じて、私たちの現実構築に影響をあたえる。とくに、重要なのは会話である。私たちは具体的他者のもとより、マスメディアや自己さえも相手に会話をおこなう。会話によって、現実構築されていく。制度的諸力は自己が自己に対しておこなう会話にさえ入り込む。この会話自体、脱埋め込みメカニズムのなか切り出される。いまや文脈に依存しない会話の断片は、再埋め込みされるべき言説として流通する。言説の中には、専門家システムの裏打ちをもって優勢な影響力をもつ言説がある。これを支配的言説とよぶ。

c. 語り＝自己アイデンティティ

言説はあふれだし、知識の再帰的専有が生じる。自分の言葉と専門家による支配的言説との区分は困難である。会話は「専門家によれば・・・」という引用元への参照なしに行われる。この状況のなかでは、先のポリティックスは、支配的言説への反論、融合、無視、換骨奪胎、パロディー化によって、自分の声を聞こうとする試みである。たちまち語りは陳腐に流通する言説と化してしまう。しかし、私たちは話すことで自己を見いだすほかない。

d. 言説による自明性の構築

高度近代において、私たちはさまざまなエージェント—身近な人びとはもちろんマスメディアによる想像上の共同体の成員まで—との相互作用過程を通じて、現実を構築する。支配的な言説—制度的な働きかけ—のもと、私たちはそれぞれおかれた状況に即して語り、言説を編み出し、具体的な対応をとる。日常生活の自明性はこのような構築によって維持されている。

(3) 再帰的専有＝知識のあふれだし

ところで、このような状況にあるのは、“学問世界”にいる私たちも同様である。医療化の例にあるように、第2次の担い手の発達や教育の普及によって、知識はその占有権をもつとみなされた専門家集団や学会からあふれだし、統制に服さなくなった。抽象的学問用語への不慣れさ、聞き慣れなさを利用した専門家からの説明は説得力を失う。この認識は学問的アプローチをどのような立場からおこなうべきかという問いにつながる。

「近代化の社会心理学」は、以上の構図のもと、社会的構築主義を主要なアプローチとして展開する。ただし、社会心理学的な力点移動を経る。

II. 「近代化の社会心理学」へ向けて

1. ふたつの問い—アプローチと社会的位置取り

バーガーらは主観的現実と客観的現実の弁証法的関係を通じて、現実が構築されていることを示した。現実の社会的構築が真空のなかではなく、近代という歴史的社会的状況のなかでおこなわれており、それが私たちの意識に特徴的な構造をあたえている。ギデンズは、近代化の制度的特徴を時空の分離、脱埋め込み、知識の再帰的占有により縮約した。バーガーらがいう近代における制度の特徴は、ギデンズのいう「脱埋め込みをとげた制度」であり、「ローカルな営みをグローバル化した社会関係に結びつけ、日常生活のほととんどの側面を組織化していく」^{注48)}。そのなかで、アイデンティティは語りを前提として、人生経験を統合することからもたらされる。学問的知識も“客観的”、“絶対的”真理としてではなく、一言説として再帰的に流通する。学問的知識は、研究者にとってときに「自己成就の予言」のように働く。日常生活を送る私たちにとっては自らの経験を—それに従ったり抗がったりして—統合するきっかけにもなる。

「心理」もその例外ではない。近代についての認識を導入することは、社会心理学、心理学がすでに所与のものとしてあつかい、近年ますます社会的にひろく定義され実体化されつつある「心理」自体を構築されたものを見なすことである。「心理」の歴史的社会的構築を前提にする。「心理学化」とは「心理」をトークンせしめる専門家システムおよび「心理」を“貨幣”とする市場が成立することである。カウンセラーにかかるクライアントは自己の問題を「心理」の問題だとすでにわかっており、カウンセリングがどのようなものであるかということを知って現れる。そのため、カウンセリングは治療上の紆余曲折はあるにせよ、円滑に展開する。カウンセラーにとってはますます「心理」の問題が現代の主要な問題として現れる。「心理」学的知識は再帰的な現実構築のプロセスにあり、研究者にとっては「心理」的現実とは自明な“真実”としてたちあらわれる。一方、私たちにとってみれば、「心理」は互いの行動の背後にある、行動の説明や解釈の場である。「心理」は相手を納得させたり説得する根拠として働く。たとえば、現在「心理的ストレス」は職場を休む公的な理由のひとつである。職場を休もうとする者は「ストレス」を賭金に、雇用主や同僚にたいして、自己の生活空間の確保や生活上の都合や利得をえる。私たちは、日常生活を“つつがなく”送り、制度的働きかけのなかで自己のアイデンティティを確保するため、ライフポリティックスを駆使する。この観点からは、カウンセリング場面はカウンセラー側からすると「心理」それ自体に働きかける治療場面であったとしても、「心理」という象徴的トークンを用いて、クライアントがおこなう、一種の権力的なポリティックスとみなすこともできる。「心理」をめぐる、クライアントとカウンセラーが現実定義にしのぎを削っており、クライアントにとってはカウンセリング体験は“心理的効果”よりも日常生活で自己の現実を構築する根拠になるかもしれない。

心理が社会的構築物として括弧に入れられ、「心理」であるという認識のもとに、社会心理学であ

れ、いかなる「心理」学がありえるのだろうか。また、社会的な仕組みとして「心理」の生産現場にいたことが明らかになったとき、大学という制度、研究者という専門的システムの一員として、私が産出する知識とはどのようなものであるべきなのか。これらの問いをアプローチの問いと社会的立場取りの問いとよぶことにしよう。両者は密接に関連しており、再帰的近代のもとでの研究実践をおこなうとき、つねに考えるべき問いである。この問いは以下の論考を経た後、とりあえずの答えを得ることになる。

2. 社会心理学的アクセント

前章で、社会的構築主義的アプローチを「社会心理学的な力点移動を経て」用いるとした。社会心理学的構築主義である。では、「社会心理学的力点（アクセント）」とは何か。しかし、社会心理学的立場について包括的な合意を得ることは不可能である。ここでは、本論がよる社会心理学の最小の定義から出発する。ついで、社会心理学的構築主義の立場から、心理学の主要概念である「パーソナリティ」をどのようにとらえるかという事例を示す。このテキストは、もともと既に発表したものを改変したテキスト^{注49)}である。引用されたテキストは社会的構築主義の解説であると同時に、簡単な補足と注釈をつけられて、社会心理学的構築主義の立場を明示する劇中劇の役割を果たすことになる。

1) 社会心理学的立場

多様に分岐する社会心理学の領域を共約する立場を設定するのは困難である。しかし、隣接する諸学との比較のなかで最小限の定位を試みよう。人類学は類として人間を扱い、社会学は個々の人間によって創られる客観的影響体制を対象とし、生物学や動物行動学は自然環境のなかの個体を扱う。そのなかで、社会心理学は個人から出発するということができる。ここで、「心理」ではなく、個人であることの注意されたい。心理学が人間に「心理」があることを実体的に想定することに警戒してのことである。また、個人は西洋近代が脱埋め込みした自律的な個人を必ずしも意味しない。「共同実践への構え」^{注50)}をもって、そこに共にいる個をさす。社会心理学的アプローチは、そのような個人と社会・文化体系が出会う、現実的、状況的場面の把握^{注51)}を志向する。本論のアプローチは基本的には安倍の『社会心理学』^{注52)}における場面の取り扱い—中間的接近法^{注53)}—に依っている。

2) 事例：「パーソナリティ」の構築

日常生活において、私たちが“性格”や“パーソナリティ”についてあれこれ推測したり話したりする機会は意外に少ない。つつがなく暮らしているうちなら、問題にならない。相手との関係がぎくしゃくし、解決が必要になったとき、私たちは“性格”や“パーソナリティ”があたかもそこにあるかのように推測し話しだす。結果として、“性格”や“パーソナリティ”が、夫婦を別れさせ、子供を施設にいれ、福祉手当を支給する根拠として用いられることもある。一方、研究者である私たちは、純粋に理解するためだけに、“性格”や“パーソナリティ”を技法をこらして取り出し、表、図、記号、アイコン、数値などによって明示しようとし、さらには啓蒙書出版のプロジェクトに加わる。

社会的構築主義の立場からすると、“性格”や“パーソナリティ”は、日常生活場面で出会う個人間で、問題場面で、ときに制度的な手続きのなかで、あたかもそのようなものとしてあるかのように現れ、消え、再現され、場合によっては一件記録として文字のテキストに固定される、社会的相互作用過程で構築される現実のひとつである。

(1) 社会的構築主義

私たちは、いまある日常生活を現実と思い、現実とはかくかくであるという知識をもっている。あるいは、もっていると考えている。病気を発見した医者と告知されていない患者の例を考えてみよう。この両者は、医者—患者という相互作用過程において、別々の現実と知識のなかにいるが、やがて問題の解決のため両者間で新たな現実が構築される。バーガーらは、私たちが自明視する「現実」が主観的現実と客観として現れる現実との不断のすりあわせのなかで構成されるとした。その第一の基礎となるのが言語を媒介にした相互作用なのである。相互作用過程において、現実構築され変容する。先の例では、医学的知識の進展や代替医療の浸透の程度によって、また、病状の変化、家族力動の展開にともなって、そこで構築される現実や知識は変化していく。あたかも真実として定位された現実、あくまで暫定的、しかも社会的・歴史的に拘束されている。特定現実が私たちに客観的に感じられ実際の拘束力をもつのは、社会化のプロセスにおいてその現実定義が内在化されているからである。

相互作用過程を通して現実が構成される。すると、私たちが生きる社会的世界には、さまざまな現実が重層的に存在することになる。それを多元的現実とよぶ。そのなかで最も「至高」なのは、日常生活の現実である。この現実他領域の現実構築の原型を成している。私たちは言語によって経験を意味づけ統合し他者とわかち合う。日常生活の重視は言葉、語り、会話への着目を惹く。

とはいえ、日常生活の現実が私たちが素手で作り出すもの、「頑固な処女地」^{注54)}と考えても行きすぎである。制度化がすすみ啓蒙的科学知識が浸透する近代化のもとで、日常生活の現実構築される。私たちは自身の健康や病気について語り合う。そのとき何気なく医学用語を口にするだろう。その実、専門的なことはわからない。しかし、私たちは医学用語で説明することでわかったとする。私たちは自らの言説を医学的なものにそって、それを背後に斜め見ながら編制する。また、医療は、保険、保健制度によって支えられている。患者—医者関係は、カルテ・看護日誌・各種証明書などの紙に定着される。保険がおりるためには医師の証明書が必要であり、これは先の患者—医者の権力関係における医者の優越性の源泉である。社会的現実、医学的定義によって一義的に決定されるわけではなく、たとえば、医者—患者—家族—地域社会の様々なエージェント間での交渉、せめぎ合いから生まれるのである。構築主義的理解とは、いわば、近代的な合理性や制度的平等を標榜する支配的な言説によって定義された現実を解凍して、そこに展開されるダイナミックな社会的過程を明示することなのである。

(2) 構築主義的「パーソナリティ」

バー^{注55)}は伝統的心理学との対比によって構築主義の「家族類似性」的な次の特徴をあげている。

(1) 反一本質主義、反一実在論、(2) 知識の歴史のおよび文化的な特殊性、(3) 思考の前提条件、社会的行為の一形態としての言語、(4) 相互作用と社会的慣行への注目である。構築主義的「パーソナリティ」も同様の特徴をもつ。以下、パーの整理になぞらえてまとめてみよう。

「パーソナリティ」といった本質がもともとあるわけではない。ある人のなかに、その後「パーソナリティ」とよばれるようになるものがあたかも実体であるかのように現れる過程がある（過程への注目）。要因による因果的な説明や生物学的決定論によって特定される本質をもたない（反一本質主義、反一実在論）。前項と関連して、私たちが蓄積する「パーソナリティ」に関する知識は実在の「パーソナリティ」に関するそれではない。「パーソナリティ」は、心理学という学問領域で、そのメンバーである私たちが研究実践のなかであたかも実在するかのごとく扱うことで維持されている。「パーソナリティ」とよばれなくとも、それにあたるような外在化されたもの—性格、人格、人となり—は、さまざまな言葉や話を交すなかで現れる（思考の前提条件、社会的行為の一形態）。そこで展開される「パーソナリティ」は、それぞれの個人各自が参加する相互作用過程のなかで、つねに変動の可能性をもちながら、暫定的に場所を見つける。規則性が～すべしという暫定的な規則や決めごとに姿をかえ、ときに成文化され、変化に抗する根拠となる（社会的慣行）。様々な参加者は、「パーソナリティ」についての現実＝知識を参加によって外在化させる。分析的にとりだせば、それらは異なるヴァージョンからなる「パーソナリティ」理論である。提出される現実＝知識は時代や文化に拘束されており、心理学における「パーソナリティ」も例外ではない（知識の歴史のおよび文化的な特殊性）。

構築主義は、伝統的なパーソナリティやアイデンティティ概念を脱・再構築する立場であって、それを“実証”するための特定の理論や方法をさすものではないのがわかるだろう。広く研究やアプローチを導く思潮なのである。

(3) 構築学的「特性」とアイデンティティ交渉

次に、心理学のパーソナリティ、性格理論の領域で、社会的構築主義がどのような貢献をしているかを見ていく。伝統的な「パーソナリティ」研究である特性論への構築主義的アプローチとアイデンティティ交渉をとりあげる。

「パーソナリティ」研究において、有力な5つの特性、“ビッグ・ファイブ”が見出されていることは周知のとおりである。クラーク^{注56)}にそって議論を要約しよう。特性論については、ビッグ・ファイブが日常用いられる言葉の分析から得られたということから、5因子がパーソナリティの“客観的”心理学的特徴なのか、もともなった言語の意味的關係を示しているのかについて議論がある。ハンプソン^{注57)}は、懇意の相手と未知の相手への評定においても同じように5因子が得られると報告する。すると、これら因子は「ある言語コミュニティに属するすべての構成員に共有されている固

有の言語的性質を反映し、そのコミュニティに属する人なら誰でも高い規則性と信頼性をもってあらわれる」ものとなる。ハンプソンは問う、「評定者が一連のパーソナリティ特性に基づいて対象を評定するとき、これは行為者である対象のパーソナリティの研究なのか、観察者である評定者が抱くパーソナリティの印象を研究しているのか」^{注58)}。

構築主義は、パーソナリティを行為者の内面的な特性としてとらえない。むしろ、パーソナリティを行為者、観察者、自己—観察者の相互作用の中で暫定的に現れるものとする。クラーエは、「社会的構成主義では、・・・パーソナリティについての推論を社会的・文化的な媒介過程の産物とみなしている。つまりそれは、観察者（素人も心理学者も）がメンバーの合意をもとに共有された意味システム（すなわち、言語）を用いて行動データのカテゴリー化や解釈を行う過程なのである。このアプローチでは、パーソナリティ印象を伝える主な手段は言語であると考えられるため、特性用語の言語学的性質を研究することが中心となった」^{注59)}と評する。

社会的構築主義は「パーソナリティ」が実体的パーソナリティとして語られるときの言葉に注目する。バーガーに即して言えば、言語により対象が対象として分節化され立ち現れ、同時に私たちは主体を擬制し、対象は内在化され、現実が現実感をもって現れる。それは、私的というよりは、他者と共生するための間主観的世界である。人を評価し意味づけ、出来事や事件を解釈し説明するために、社会的にどのような意味カテゴリーが慣用として用いられているか、解釈レパトリーの分析^{注60)}が重要な意味をもつ。レパトリーがそれぞれの下位文化を特徴づけ、その下位文化を分かちあう個々人の現実構築の特色となるだろう。高校教師のライフヒストリー研究において、高橋（2000）^{注61)}は、インタビュー場面での「～してあげる」という口癖に注目して、擬似的な「親子関係」モデルが教師側に根強いことを示している。

表1.高校教師の語りの特性(1)―「させる、あげる」(掌握)
*高橋は、13名の高校教師にインタビュー調査をおこなった。そのなかで高校教師の語りの特性として(1)「させる、あげる」と(2)「一生懸命」をあげている。

事例	テーマ	語り
2	授業	「ネタ」という言い方悪いけども、これをネタに興味引かせてつかませておいて、こう引っ張って行くっていうネタ作りはかなりしたから。その学校に合うようにいろいろやって行ったから。
7	よい教師	やっぱり生徒の気持ちでものごとを考えてあげながら、甘いと判断する時には厳しくやっぱり指導したり、メリハリを持った教師ですね。やっぱり甘い教師にはなりたくないですね。…生徒の立場で確かに物事を考えてあげるのもそうだけど、叱ってあげて…厳しく叱ることが優しさにつながるっていうかね。
8	担任	いろんなことをさせる。…登山とかキャンプとかそういう集団でやるのをけっこうやったんですよ。…そのなかで生徒が見えてくるんですね。そのなかでまとめていくヤツもあるし、逆に腐って行くヤツもあるんだだけね。リーダー性見出してまとめていくっていうかね。
10	担任	なんかいろんな種類の問題がいるの。集団でだったらさ、それをつぶせばいいんだけど、いっぱいいるの、いろんな種類の・・・やっぱり教師だったら担任しなきゃいけないって、自分のね、かわいい兵隊がいる感じ。担任があればね、自分の城があるって感じだね

心理学的な「パーソナリティ」に限らず、「性格」や「人柄」がどのような場面で誰との間で問題になり、どのような社会的影響を及ぼすのか。このような「パーソナリティ」の構築現場へのアプローチはまだ、ほとんど行われていない。現場自体へのアプローチは現在のところ、会話分析を用

いたエスノメソドロジーなど社会学的研究^{注62)}にわずかに見られるだけである。社会心理学では、アイデンティティをめぐるスワン^{注63)}のアプローチが参考になるだろう。彼はアイデンティティとは静的な実体ではなく、交渉のなかで得られるという。たとえば、知覚者の期待が社会的相互作用を導く場合がある。その期待が確かめられるように、相手に行動を引き起こす。しかし、そのような働きかけを受ける側も、相手の期待や意図を推測し、相手の行動のうちに自らの期待を確認できるようにふるまう。このような両者の相互作用過程は、アイデンティティをめぐる交渉と考えられる。スワンは、「アイデンティティ交渉という枠組みがもつ利点は、それが明確に、個人的な特徴（ex.目標、議案、生活史）と社会構造的な変数（ex.規範、役割、社会的慣習）の両方が社会的相互作用の特質や結果に及ぼす影響を認めているところにある。これはかなり広い射程をもつ枠組みであり、人間学的personological、社会的パースペクティブ、それぞれ単体では到達することのできない洞察へみちびく可能性をもつ」と結んでいる。

(4) 「技法」ではなくアプローチ

構築主義的には、「性格」は固定化された実体ではなく、そのような「性格」が構成されるプロセスとしてとらえられる。「性格」自体がとりあげられるというより、相互作用過程において、ある現実が構築されるなかで、「性格」なるもの、アイデンティティが暫定的に作られる過程への関心が主になる。ここでは、広く構築主義的アプローチに共通してみられる特色をあげてみた。構築主義的研究にはパーソナリティ検査のように標準化された特定の技法があるわけではない。そのアプローチの仕方は基本的には広い意味での言説研究ということができる。

次にあげる研究もまた、構築主義を特には掲げてはない。しかし、社会的構築主義は、意識がそうであるように具体的な問題についての、「～についての」アプローチであって、社会的構築主義はそれ自体として論じても得るところは少ないのである。むしろ、自己が取りくむ具体的課題のなかに現れる姿勢である。アイデンティティの多様性（横断的な複数の場面）、医療側からは見えにくい病者のアイデンティティ（特定の制度的場面）に「語り」を手がかりにアプローチした。力点は脱構築よりも、自分が置かれている現場に即した現実を構築しようとする著者の姿勢にあって、構築主義的である。

(5) 研究紹介—語られる共同性と病いの語り

a. 「語られる共同性—ライフストーリーをよむ」^{注64)}

筆者石井はまず、沖縄本島北部にある備瀬集落でフィールドワークを行い、本土への出稼ぎ体験を聞きとっているうちに、戦後、備瀬出身の人が関西へ出てメッキ業に従事した人が多い事実がみつく。彼らは関西でふるさと会を作っているという。次に、石井は大阪のメッキ工場にいた。一人のメッキ工場の経営者が語るライフストーリーから、かれが自分たちや他者を分類するカテゴリーを抽出し、そのうちのどのカテゴリーがどのような場合に前面に出てくるのかを探った。そこに、出身を同じくする者が語りに表明する共同性が現れる。アイデンティティの問いへの答えは、固定的ではなく、「それぞれの歴史状況によって意味を変え、しかも目の前の相手に応じて選択されるも

の」であり、本来そのような多義的存在を一義的なものに研究者は仕立てがちではないかと問うている。石井論文では、インタビューでの発言や新聞の投書記事が編成され例証となっている。私たちは、「沖縄人」、「日本人」といったアイデンティティをもつと言ってしまうがちである。しかし、このようなラベルに理解が留まる限り、両者は対立項としてしか出会えない。石井は、一見固定的なアイデンティティが状況依存的なプロセスのなかで構築されていること、それを密着的なフィールドワークで「教えられた」とリリックに結んでいる。この認識は民族誌を「対象者」との語りのなかで作ridす共同作業とする出発点^{注65)}になるのである。

b. 『臨床人類学』^{注66)}、『病いの語り』^{注67)}

クライマンはバーガーの現実構築をアプローチの基本とする精神科医・医療人類学者である。『臨床人類学』においては、台湾における病気治療の多元的ダイナミックスをエスノグラフィックに描き出している。台湾では、西洋医療、中国式医療、薬草屋、シャーマンによる伝統的治療などが複雑な現実を形作っている。病者とその家族は多様な治療者と出会い、病気とケアについての現実を構築していく。クライマンは、治療者―病者間のやりとりを観察し、そこで交される説明モデルに注目している。様々なやりとりの粘り強い観察・比較により、生物医学主流の現代ヘルス・ケア・システムに人類学的視点を導入する重要性が指摘される。『病いの語り』冒頭で、クライマンは、重篤な火傷をおった7歳の少女との出会いについて記している。治療は、化膿した皮膚繊維を引き剥がすという恐ろしい苦痛を伴うもので、臨床学生だった著者にできることといえば、少女の手を握ることだけだった。このような場合、少女とともに治療者もなす術もないという心理的苦悩を味わう。クライマンは、彼女の手をにぎりながら、彼女の経験について語ってもらえないかと話しかけた。すると「彼女はかなり驚いた様子で、うめくのをやめ、・・・話しているあいだ、彼女は私の手をいっそう強く握りしめ、叫ぶことも、外科医や看護婦を退けることもなかった。病いの経験について語り合うことが『治療的意味』をもちうる」事実気づく。病いは、医学的な疾患からだけ理解されるべきものではない。患者は病いを患うことを通じて、苦痛や不便といった私的な体験と医療による公的な定義、家族、職場との関係、自らの生活史のなかで現実をつくる。クライマンは、治療者の仕事は、病いについて患者・家族が物語を語れるように配慮して誘導し、その人の慢性病の微小民族誌を組み立て、ケアについて多様な視点を含んだ十分な説明をして両者間に取り決めを行い、短期の医学的精神療法をおこなうことという。微小民族誌とは、まずは患者の病いの語りの再構成を通じて、ついでは病いの問題のリストアップ、それへの援助的介入のリストアップを通じて、患者の経験に身を置こうとする試みである。それを通じて、治療者は当然、患者の生活史を理解することになる。医療の側では、看護日誌やカルテの一行ですまされていた病者の経験を語りを媒介に再構築する。語りは病者の癒しだけではなく、治療するもの自身の救いになる。語りがまさに臨床的に重要な支えになるのである。彼の「医学的モデルへのチャレンジ」は、私たちの言葉でいうと、医学的モデルの脱構築、特定の場面で展開される相互作用のリアルな把握、相手との実践的關係の形成、現代医療への提言という点で、まさに構築的アプローチである。

社会的構築主義は、従来の実証主義ではない「もうひとつの」やり方をいう^{注68)}。過程を重視し、動的な過程を文字によって定着させるという困難な作業を強いる。しかし、現代では、最新の宇宙理論でさえ日常生活の話題になるほど、知識の波及、再帰的循環が行われている。このような高度近代化は、日常生活世界と学問世界が実は不可分であったことを露呈させる。脱構築、過程の明示、実践の契機をはらむ構築的アプローチは、学問の限定された営みを自ら解き放つ可能性を秘めている。

3) 注釈：社会心理学的構築主義

構築的理解の3つの働きを指摘しておきたい。とりあげた研究例に着目すると次のように言えよう。第一は、既成の学問的知識を脱構築する批判理論としてのそれである。構築的アプローチは、「パーソナリティ」をすでにあるものとして見なさず、それがどのように構築されるのかを示す。その意味で、既存の「パーソナリティ」への心理学的取り組みに対して脱構築的なアプローチである。相互作用場面において「パーソナリティ」が現れるとすれば、心理学者が「パーソナリティ」を用いて対象を理解する過程自体が研究対象になろう。心理学的「パーソナリティ」は、特殊な言語コミュニティにおける帰属のレパートリーとなる。構築的アプローチは、心理学の営みを特権化せずリアルな社会関係においてとらえる。第二に、自己の繰り込みをおこなう。自己を括弧に入れない、相手の言い分から出発するという相互的で再帰的な働きである。これは当事者の語りや釈明、説明に耳を傾け、その語りを自分と相手との、そのときその場の関係や過程でとらえる現場での志向をふくむ。第三に、このような姿勢は、制度的に定義された平面的な個人を、多面的な個人として議論に加える必要性を生む。ここに、相互作用の当事者たちを離れて別の場所から見てきた研究者を実践に引き込むきっかけがある。実践への橋渡しをする働きである。これは学問的知識の還元と適用ではない。現象のおこっている当の現場で、その場にいる人びとと共に知識を作ることである。

先の石井とクライマンはいずれも、構築主義を標榜しているわけではない。私がこれらを構築主義的としてあげたのは、構築主義は具体的な問題や事象を描くときに発揮されるアプローチと考えるからである。構築主義は創られる研究作品のなかに埋め込まれているべきものであって、自然科学的な実証研究で検証の対象になる意味での“理論”ではない。石井もクライマンもその場にいる自己を除外して考えていない。自分が見ている現象が何であるのか、その事例性を考えている。

土井^{注69)}は、構築主義的な研究の反省として、公的な領域での語りだけをとりあげ、日常の相互作用場面で個別のケースを産出させる言説や特定の文脈のなかで具体的に実践される言語活動への着目が少なかったことをあげている。土井自身の論は中学生の暴力事件を対象にしている。そこでは、とくに、福祉施設の匿名ワーカーの手記を素材にしている。これによって、新聞などで扱われ社会的事件になる以前のプロセスを窺うことができるとしている。

杉万^{注70)}は、鳥取県の過疎山村、智頭町の地域おこしにかかわってきた。智頭町は郵便配達と福祉を結びつけた「ひまわりシステム」〔郵便配達は毎日まわるから、お年寄りをひまわりに見立てて社会が暖かく見守る〕で知られる。この地域の町おこしの特色は、研究者と町民との対等のかかわり

である。そのプロセスのなかで、ある集落にログハウスを建設した。集落民もログハウスの運営にたずさわる。ところが、そこから得られる収入はまったく微々たるものであった。なぜ収支があわないこの活動に集落民はかかわるのだろうか。著者らは集落民とのインタビューのなかに、「総事(そうごと)」という言葉を見つける。「総事」とはかつておこなわれていた集落民総出の無償共同作業である。この言葉は、研究者によって見い出され集落民に返されることになる。それまで言語化されていなかった営みが実感できる言葉によって定義づけられる。「総事」は血縁と地縁が重複するなかで機能した前近代的制度であった。それが、脱埋め込みされ、新しい文脈をつくり、再埋め込みされたのである。しかも、再埋め込みされた「総事」はかつてのそれとは異なり、ログハウスを利用する外部者相手の「総事」であり、外部に開かれている。「ひまわりシステム」同様、言葉による現実の再定義—新しい文脈の生起という高度近代の運動をみる^{注71)}。

杉万の例は次の2点を教えてくれる。第一には、現実の再定義が実効力をもつには、制度的な裏付けの再利用が必要であること—「ひまわりシステム」は、郵便の集配システム、ログハウスは「総事」を利用している—、第二には、この現実構築力は現場とのかかわり—自己の社会的位置のとり方—から生まれることである。社会的構築主義は、現実の脱構築以上に、バーガーらも指摘していたように現実の再構築に結びつくべきで、そのためには研究者はできるだけ当の現場に近くにいることを要請される。

Ⅲ.「近代化の社会心理学」素描

本論「近代化の社会心理学」はバーガーらの議論—「近代化が日常生活の自明性を支える意識構造にどのような影響をあたえているか」、「工業生産と官僚制の波及、制度化へのプロテスト」—とギデンズの包括的な議論—「高度近代の制度的特性」、「自己アイデンティティのライフ・ポリティックス」、さらなる問い—「再帰的な近代において、近代化をとらえるどのようなアプローチがあるか」—をめぐって、構想されてきた。明確な像を提示することは依然かなわない。しかし、3つの断章にまとめることで、素描を提出したい。

1. アプローチ—日常化とプロセス分析

私たちの日常生活の現実がどのように構築され、自明性が維持されているか。具体的な場面で個人をとらえる社会心理的構築主義をとる。2つのアプローチが考えられる。脱構築的プロセス分析と日常化の分析である。それぞれは、バーガーらがすでに示していた現実の脱構築と再構築という2つの視点に対応している。

児童相談所における不登校事例の歴史的推移を例としてとりあげよう^{注72)}。図1にそって要点を述べれば、昭和20年代から30年代では地域とのつながりのなかで児童の生活環境整備を進め、ケース導入時以外相談所の動きは活発ではない。相談所は“不登校”のケースを持たない。30年代、40年代においては家庭のしつけがクローズ・アップされ、地域社会というより、家庭、学校が個別の

○昭和25年

事 例 1 小学生女児
相談区分 被虐待孤児

	日付	その他の機関	学校	児童相談所	家庭	本児
導 入	3/8	民生委員 調査、保護を福祉 市に委託 児童委員、里親、 施設入所希望		民生委員から連絡 調査 意見 ・里親もしくは 施設入所		面接 ・家族について ・就労先について ・生育歴 ・性格
	3/8			措置 ・Mへ一時保護		
	3/14			一時保護解除 A園入所		

○平成7年

事 例 2 中学3年男子
相談区分 不登校

	日付	その他の機関	学校	児童相談所	家庭	本児
導 入	5/24		・親の多忙さ ・本児の知的能力 ・本児の性格 ・問題行動 ・不登校への解釈 ・家族について ・今後の対応	受付 ← 学校へ照会 本児、母の来所 父との関係改善を助言 心理判定、一時保 護の説明	母からの連絡 ・本児の補導歴 ・不登校の現況 ・本児と父との関係	面接 ・不登校の理由 ・補導内容
	5/30	・事件内容 ・交友関係 ・調査予定		家裁への照会 <u>受理会議</u>		
観 察	6/22			本児及び家庭の抱え る問題を明らかにし ながら、方針検討 家庭への状況確認 家庭の方針に従う	児相から連絡 ・生活の様子 ・家庭の方針(様子 を見る)	父との関係 ・友人、学校について
	9/7		・登校状況、学校の 考え ・進路、友人関係	学校への状況確認	・家裁への通所について ・学校とのつながり ・主訴は不登校	
	9/22	家裁 ・処遇について 不処分 ・不登校への見解		家裁への照会		

対応	10/30			本児、母の来所 ・心理判定の予定 ・助言 生活経験の拡大	面接 ・学校との関係 ・交友の状況 ・父と本児の関係	面接 ・登校の意思→なし ・父との関係
	11/10 11/12		・相談室、保健室 登校について	家庭訪問 学校へ連絡		
	11/16	民生委員 ・父母の性格 ・近所との交流 ・兄の精神的問題		民生委員に連絡		
	11/22			心理判定 男性像の獲得 医学診断 自立の援助 所見(福祉司)		
	12/6			今後、メンタルフレンド交流、家族援助 メンタルと交流1/26～		メンタルとの交流
	3月	メンタル ・話題 ・本児の印象	児相から連絡 ・登校状況 ・進路、交友関係 ・本児への評価	メンタルとの情報交換 学校へ状況確認 家庭へ状況確認	・本児の生活状況 ・父との関係 ・本児への評価	
終結	3/12			所見 改善点、評価、理由 [<u>処遇会議</u>] ケース終結が適当		

図1 「不登校」への相談所の対応

*本調査では昭和25年から5年ごとに平成7年までの記録から「学校へ行かない、行けない」ことが問題になっているケースをとりだした。「不登校」という相談区分がみられるのは、平成2年度からで、それ以前は「長欠」とされていた。しかし、昭和50年までは「長欠」自体少ない。昭和50年、60年において「長欠」が急増して、「不登校」のカテゴリができていく。事例1では、相談所自体はケースをもたず、問題の発生から直接的に措置をおこなう。事例2においては、相談所は多くの機関や担当へ参照する機能を果たしている。心理判定や医学診断のほか、「メンタルフレンド」というボランティアを組織し活用している。

機能的なエージェントとして現れ、それぞれに対応をおこなう。50年代にはいと、精神科医、心理学者など専門家がかわり、判定の用語も多様になり、不適応や神経症的な不全が指摘される。特定の原因や責任主体は指示されないが、不可抗力の“病気”と位置づけられることで、家庭に原因が帰属される。相談所は不登校のケースを持ち、制度的な対応を確立する。以上は、現時点において、その対応プロセスや意味づけが自明視されている「不登校」が歴史的にどのように自明なものとして現在まで構築されてきたか、そのプロセスにはどのようなエージェントがかかわっているのかを明らかにするアプローチである。さらに、児相相談所が福祉政策のなかでどのように位置づけられてきたかというより国家レベルの制度分析も必要になろう。これが「脱構築のプロセス分析」である。医学的・心理学的言説や官僚制度的な言説、手続き論が記載されている資料が基になる。また、相談所の対応の歴史的変遷やそのときの相互作用場面にせよ、マスメディアなどの間接的な言説環境に大きく影響される。支配的言説の編成過程の把握が重要な課題になる。

しかし、現実の構築は書類に記載されることにつきるわけではない。親、子ども、教師、相談所員が向き合う現場での相互作用こそが現実定義や意味付与がおこなわれるところである。親・子の側からすると、相談所への相談は「日常化」の一場面である。相談所に定期的に通うことで、それまで問題状況であった日常生活が一定のリズムとパターンをとって「日常化」される。相談所への来所は学校へ不登校を説明する有力な対抗定義として役立つ。

「日常化」は個人が日常生活をつつがなく過ごすためにおこなう働きかけや工夫の総体である。これはさきにバーガーらが述べた、「日常生活において生じる出来事や困難をうまく切り抜けさせてくれるような意味の網の目」を含む。しかし、本論では十分に展開できなかったが、私は日常化をバーガーらが強調する知識や認知スタイルといった意味づけの体系としてだけでなく、部屋の配置や道具の利用といった物質的側面を含んだ生活空間の構築という広い概念として用いたい。たとえば、要介護者を抱えた家族は日常生活を円滑に送るため、部屋の改造、用具の購入、器具の工夫を行い、1日、1週間の介護スケジュールを確立しようとする。また、同時に日々生じる感情的ないさかいや介護を担当する自己の存在価値についての疑問に対応する術も見つけなければならない。このような総合的な渾身の努力こそ「日常化」のモデルである。

「脱構築プロセス分析」による、制度分析・支配的言説の把握は「日常化」のアプローチにとってきわめて重要な意味をもつ。ギデンズの認識を拡大解釈すると、日常生活は優勢な制度側が発する支配的言説と個々の語りのせめぎ合いである。その際、私たちは支配的言説のなかで、自己のおかれた生活史的背景や状況にしたがって反応する。言説を生きようとする。換言すると、日常化とは、優勢な言説と語りのせめぎ合いの中から、自己の生きられた言説を紡ぎ出すことなのである。脱構築的プロセス分析と日常化は、社会的構築主義が脱構築と再構築の対であるように把握されなければならない。

このような両面的なアプローチは当然、そのようなアプローチをとる研究者を除外しない。何らかのかたちで、研究者はこの現実構築に参加することになる。また、参加するような立場にいないければ調査が不可能なのである^{注73)}。このように問題の発生から現実構築の過程をできるだけ、現場に近い位置でとらえるという姿勢が近代化の社会心理学に要請される。つねに自己の位置づけが求められる。

2.理論—“橋頭堡”として

学問的アプローチは象徴的トークンによって特定文脈における知識の脱埋め込み—再埋め込みをはかる。もともと特定の文脈を背景としていた知識が縮約され、一般化される。ところで、「特定の文脈」とは、時間と空間、登場人物が特定された文脈である。学問的知識は時空の分離、脱人格化によって一般性を得る。この一般性は実際には特定の文脈—学問的世界—に依存する。

近代化の社会心理学的アプローチは二重の括弧入れによって学問的知識の脱構築・再構築をおこなう。すなわち、ある現象が一定の支配的意味をもって—それは実はさまざまな言説のなかのたまさかの結節点にすぎないのだが—立ち現れ、私たちがそこから分析を始めてしまう自明性をもつときに、その自明性を括弧に入れる。また、その自明性を分析するのに用いられる学問的用語—それはさきの自明性を支える強力な言説—を括弧に入れる。私たちはある現象を説明するときに、機能的な同一性をもとに、「これはいわゆる・・・（トラウマ、同一性障害・・・）ですね」という。そのものの言いや個別場面にもどす。そのとき、現場の言葉による状況の表現が生まれ、知識の共有が可能になる。

学問的知識はどのような役割を果たすのだろうか。ここで“橋頭堡”という比喻を用いたい。まさに、問題に取り組むために用いられる枠組みであり、ただしその枠組みは分析において解体されていく。極端に言えば、学問的知識はそれが具体的な場面、プロセスを分析するにあたって、いかに解体されていくかを示すためにある。これは学問的知識の有用性を否定するわけではない。私たちは学問的知識なしでは問題分析の手がかりすら得られない。「社会化」という用語なしに、人間の長い一生を記述することはできない。学問的知識は、多くの場面、個別のプロセスを縮約して示してくれる。しかし、生きられている現実世界はさらに深みと陰影にとんだ豊かさをもっている。学問的知識は世界の豊かさによって限界づけられる知識としてある。

3.方法—フィールドワークという“前近代”

私たちが“データ”として用いるのは、インタビュー法にせよ質問紙法にせよ、また観察法でさえ、「いま、ここで」の出来事ではなく、ある現象や出来事についての語られた・記述されたエピソードである。インタビュー中の調査者はインタビューの「いま、ここで」を相手と共有してはいるが、語られた出来事が生じた「いま、ここで」の現場にいるわけではない。私たちはエピソードが現場を転写する約束事を共有しているので、両者の対応を疑問に思わないだけである。しかし、この約束事が自明視されると、私たちの現実描写は支配的言説にそって一面的になりがちである。研究はさまざまな用語や理論という象徴的トークンをもって現実の脱埋め込み—再埋め込みをおこなうが、そのプロセスが一定の手続きになってしまい、もうひとつの現実をうみだす力をなくしてしまう。手続き的には正しいが、発見のない研究が多産されることになる。

そのような状況で、とるべき方法は現場への回帰である。たしかに、私たちがあつかう“データ”は特定の枠組みにそって現実のある側面を切り出したものにすぎないかもしれない。インタビューで聞く相手の言葉はマスメディアをつうじて流布する言説と融合してどこかで耳にした、もの言いになっているかもしれない。しかし、たとえば、出稼ぎ者が「金のために出稼ぎにいった」というとき、私たちはその言説にとどまるわけにはいかない。家族は？、兄弟は何人か？田畑はどれくらいあったのか、同級生はどんな進路をとったのか、3代前はどこから来て何をしていたのか。私たちは対象者の生活史をたずねる。これらの問いは何のために発せられるのだろうか。もちろん、表やグラフにすべき“データ”を収集するためである。しかし、それ以上に、相手がそのとき、その場所でどうしていたかという現場に近づきたいため問われるのではないだろうか。対話によって想像力をひろげ、なんとか相手の体験にあずかりたいがためなのである。

フィールドワークとはその場にいたという「存在証明」によって成立すること^{注74)}、特定の時間・場所・相手とわたしとの関係にもとづくことからして、“前近代的”アプローチといえる。しかし、再帰的な近代において、重要な方法として位置づけられる。それは、フィールドでの生活がつねに私たちの都合や見立てとは無関係に営まれることを私たちに再認識させてくれるからである。私たちが相手との間に設定する関係や適用しようとする理論や方法をつねに無効にしようとする強い力をフィールドはもっている^{注75)}。フィールドに入ること、私は、現実とは何かという問いに取り組

まざるを得なくなる。そのとき、近代の働きかけ—それは私の働きかけでもあるが—に抗するかの
ように、現実が現れる。フィールドワークは、現実を縮約し整合性のとれた言説に編成しようとする
私たちの側の勝手な現実構築を脱構築してくれるのである。

おわりに—ライフポリティックス

私たちは介護保険導入後の在宅高齢者介護の現実をインタビューによって調査している^{注76)}。施設
から、モデルケースを紹介してもらい訪問する。Aさんは78才の妻の介護にあたる79才の男性であ
る。妻は平成4年に脳卒中で入院、リハビリにあたったが、効果がないので、夫は自宅で介護する
ことにした。妻は右方麻痺、失語症で、車椅子への移乗は介護すれば可能である。

まず、おこなわれるのは1日のスケジュール化である。朝4時の起床に始まり、夜10時までの間
に、清拭や食事、おやつの時間が規則正しく入れられる。また、週単位で考えれば、訪問介護やデ
イサービス、訪問診療が木曜日と日曜日以外に設定されている。Aさんの居間の柱には予定の書き
込まれたカレンダーと電話すべき先の一覧表がかかっている。

排便のコントロールや車椅子にのせるやり方は安全におこなわれるように手順として確立してい
る。経鼻カテーテルや尿道カテーテルの消毒の手順は病院で教えてもらった。不測の事態には行き
つけの病院に電話をかけて聞くようにしている。夜には、近くにいる娘が手伝いに来る。娘は介護
する父親の身体を気づかって、仕事を辞めた。

病状が安定した後、Aさんは介護のスケジュール化、手順の確立によって、介護の日常生活を確
立しようとする。それだけではなく、「自分が介護にあたるのが妻にとって一番いい」という認知や
言葉が話せない相手の気持ちを知るための手がかりの発見、自分自身がもつ悲しさやもどかしさの
コントロールに努める。これはAさんとその娘がおこなう「日常化」の努力である。

しかし、Aさんらが在宅介護でなければならないのには、次のようなわけがある。

娘：こっちも、有りがたいと思う看護婦さんもいるけど、本当にさ、物みたいに扱う看護婦
さんもいるんだよね。そうすると・・・

Aさん：ああいうときは腹立つよな

娘：腹立つよね。すごく悔しいっていうかさ、だから、何で病院にいがねばだめ？って、とて
も任せられないっていうかさ、お願いできないって、行かないとなにされるかわからねえって
いうのがあってさ、やっぱりそれもあるよね。もっと安心して看てもらえるんだったら、こん
なに必死にならなかったかも分からないけど、どっちかっていうと物みたいに扱う人の方が多
かった。とくにうちの母親の場合は、全く表現できないでしょ、そうすればさ、なんていうん
だろう・・・ほとんど毎日二十四時間誰かついていてでしょ、そういう人に対する扱い方と、あ
の、植物人間みたいになって、ほとんど家族の人が来ない患者さん、5.6人部屋とかだから
いろんな患者さんいるでしょ、そうすれば、家族がついている患者さんにたいする扱いといない
人に対する扱いがすごく違うの、看護婦さんの。だけどそうすればさ、私たちがいなければ

私の母親もこうされるのかなっていう・・もしも来なければ、こういう目に遭うと思えば行かないでいられないもんね。それがいちばんさ、こう、ほとんど二十四時間だよ、うちだけね、泊まられなくなるまで。

Aさんにとって、週2回の入浴サービスはただ労力を節約するためではない。

Aさん：この介護始まる前は、入浴1回頼んで、あと私入れてらの。だけでもやっぱり、ホームの方でも回数多くねば経営が成りたたねーみたいでさ。年だはんで無理さねんで、おらだちさやらへろっつーもんだごで。考えてみれば、家内がしゃべれないのさ、なんでおやんじ(ご主人)ばり他の人さ頼んで自分でへねんだべなって、逆にひねくれた感じあるはんで、月曜日と金曜日来るけども、前の水曜日に入れたりしてます。やっぱり自分のおやんじ(夫)に入れてもらうのが、やっぱり気心も知ってるはんで、安心して入ってると思うんだ。私行けば、そしてあいだもの。まだ入っていたいなあ上がりたいなあつつ思っちゅ一時、まんだ入っていたい時上げると思っすーやつと、ああいうどご違うんでねべがなって〔相手が風呂にまだはいっていたいなあとかもうあがりたいなあか思っていることをこちらで察してやるのと、そうでないのとは違う〕。あの人たちやっぱり時間だごでさ。

介護保険によるサービスを利用しながら、実は在宅介護は医療がときにして利用者に抱かしてしまふ不信に基づく抵抗なのである。妻が倒れて以来の医療をめぐる経験の蓄積がAさんたちに在宅介護を選ばせている。入浴サービスは施設の要望によって週2回利用しているが、自分でわざわざ入浴日の間にいれてやっている。それは、「おやんじ」の介護と「あの人たち」とを対比し、身内がおこなう介護の意義を確認することになっている。このケースも施設から見ると、モデルケースであり、本人たちも「介護保険はありがたい」と評価する。しかし、彼らが語る現実には別の面を知らせてくれる。

私たちは支配的な言説によって自らの声がかき消されるなかでも、つねに自分の言葉を見つけようとしている。リクールは『時間と物語』^{注77)}において、「物語的自己同一性」という表現を用いた。そこに、「自分で自分自身を理解するとは、自分自身について理解できると同時に受け入れられる、何よりも受け入れられるいくつかの物語を物語ることができることである」^{注78)}という見解がある。物語ることによって私たちは自己理解に達する。とくに、時間の人間化という側面が強調される。物語的理解は不均質でときに断絶した瞬間瞬間をつなぎあわせ、不調和を調和へ導く。語る主体が自らを理解し、自己の正当性、同一性を確認する。しかし、語ることは自己を等身大に理解するものではない。リクールは書かれること(テキスト)を前提とした近代社会において、語ることは3つの自律性を獲得するという。語り手の意図、聞き手の受け取り方、記述を前提とした語りを産み出す経済的、社会的、文化的状況に対する自律性である。

たしかに、語り手がどのような意図をもとうとも、あるいは聞き手がどのように受け取ろうとも、

とりまく社会文化経済状況が語りと正反対の状況であっても、語りは語られる。そのため、語りは単に自己同一性を確認するだけではなく、自明な現実定義に対する、そうではない現実の幅広い温床となりうる。

しかし、私たちの生活は言説にとどまらない。日常生活の現実には、多様な言説のあいだで、私たちの生活史的な背景のなかで、その場を構成するエージェントとのやりとりを通して、生き生きとした現実として更新される。生活世界は他者が不在な平穏な主観の世界ではない。さまざまな制度、そのエージェントとの相互作用、家族ダイナミックス、地域社会のネットワーク、利用可能な社会的資源、経済的資源、将来展望・過去回顧、さまざまなレベルでの意味づけのための文化的体系、これらの歴史的な積み重ねによって、不断に構築され続ける現実である。社会心理学的な強調は、その語られる現実から、そのようにある状況で個人に語らしめる社会的・文化的位置の分析を志向する。

ところで、構築主義によって、現実には二重の括弧に入れられる。私たちは、フィールドワークを通じて、支配的現実定義を“橋頭堡”に現実を描こうとする。すると、「ロスト・アート」^{注7)}であったフィールドワークは私たちにとって学問制度下での一種のライフポリティックスであることに気がつくのである。

【脚注】

- 注1) 本事例の出典は弘前児童相談所保管記録である。「児童相談所資料にみる貧困層の暮らし—昭和初期から高度経済成長期までの津軽地方」（作道信介、山本幸子他 1990 青森県中央・弘前・八戸児童相談所研究紀要 pp45-65）に所収。以下2ヶ所の引用はほぼ原文のまま。
- 注2) 『値段史年表』（朝日新聞社、1988）によれば、昭和32年の公務員（国家公務員上級大卒）初任給が9200円（諸手当なし）、昭和30年の白米10キログラムが845円であるから、かなり高収入であるが、記載の誤りの可能性もある。
- 注3) 拙論（1991「近代化のエージェントとしての出稼ぎ—弘前児童相談所資料を手がかりにして—」、文経論叢第26号3号、pp79-13）におけるケース15～17を参照。
- 注4) 柳田國男 1991『都市と農村』、柳田國男全集29巻、筑摩書房、pp335-541。
- 注5) 安倍淳吉・田中泰久・石郷岡泰・大橋英寿 1967「下北半島における青年期の社会化過程に関する研究」、九学会連合下北調査委員会編、『下北—自然・文化・社会』、平凡社。
- 注6) 太田至（1988）は、ケニア北西部・トゥルカナでの道路工事に、多くの人びとが雇用されたときに生じた意識変化について同様のエピソードを述べている。太田が雇用していたトゥルカナは、道路工事が始まる以前は「私のキャンプで一緒に生活して食事をし、給料を受けとることを私からの贈与と感じており、お返しをすると申し出て私をびっくりさせた」。が、いまや、時間労働の概念が定着しつつあるという（「1988年の雨季、そして「文明」の足音—ケニア北西部のトゥルカナ地方—（現地だより）」、アフリカ研究、33巻、1988、p8）。
- 注7) 『都市と農村』 1991 柳田國男全集29巻、筑摩書房、pp335-541。
- 注8) パーガー,P.L.、パーガー,B.、ケルナー,H 1978『故郷喪失者』、高山真知子・馬場伸也・馬場恭子訳、新曜社。以下『故郷』と略記。パーガー,P.L.、ルックマン,T 1980『日常世界の構成—アイデンティティと社会の弁証法』、山口節郎訳、新曜社。以下『日常』と略記。
- 注9) 千田によれば問題にミクロからアプローチした場合に、構成主義、マクロからアプローチした場合に、構築主義という使い分けがあるという（千田由紀、2001「構築主義の系譜学」、『構築

主義とは何か』、上野千鶴子編、勁草書房、p11)。高度近代の制度的な働きかけのなかでは、私たちは、制度にのって、話し、実践する。つねに、現実を更新する働きかけのなかに、個々のアイデンティティの可能性をみる。したがって、バーガーにも触れていたように、本論では社会的現実を構築する側面を強調するため「構築主義」を用いる。

- 注10) 『日常』(p259)によれば、「現実を維持する最も基本的な事実、展開されつつある人生経験を客観化するのにたえず同じことばが用いられるということである。最も広い意味でいえば、同じことばをしゃべるすべての人は現実を維持しつつある他者なのである」。
- 注11) 『日常』、p260.
- 注12) 『社会構築主義のスペクトラム—パースペクティブの現在と可能性』(中河伸俊・北澤毅・土井隆義(編)、2001、ナカニシヤ出版)には、事例研究編として7論文がおさめられている。用いられている資料は、5編ではパソコン通信の記録、被害被害者手記、論文、特定トピックスについてのインタビュー、新聞記事が使われている。他2編では、より現場に近い内部的資料が用いられている。
- 注13) 「学者によって想像された別の現実の可能性」(the possibility of a pedantic utopianism) . バーガー,P.L 『社会学への招待』2000水野節夫・村山研一訳、新思索社、pp275-276.
- 注14) 『故郷』、p7.
- 注15) 前掲書、p14.
- 注16) 新田義弘 1980 『現象学』、岩波書店、pp97-100.
- 注17) 『日常』、 p16.
- 注18) 『故郷』、 pp23-69.
- 注19) 前掲書、p35.
- 注20) 前掲書、p156. 日本でも同様に、私が出稼ぎ研究で生活史をとった対象者のなかには、軍隊で初めて革靴をはき、牛丼を食べたという人もいるのである。また、軍隊の駐留地は大半の兵が住んだことのない都会にある。そこには遊郭など歓楽街がある。戦後の出稼ぎにおいても軍隊経験と同様の側面があった
- 注21) Heelas,P. & Woodhead, L. 2001 Homeless mind today? in Woodhead, L., Heelas, P. & Martin, D. (eds.), Peter Berger and the Study of Religion, London : Routledge, pp43-72.
- 注22) 『日常』、p252.
- 注23) 前掲書、p253.
- 注24) 前掲書、p257.
- 注25) ギデنز,A. 1993 『近代とはいかなる時代か—モダニティの帰結』 松尾精文・小幡正敏訳 而立書房.
- 注26) 前掲書、p35.
- 注27) 前掲書、p102.
- 注28) 前掲書、p42.
- 注29) バーガー前掲書、pp294-305.
- 注30) 菅原和孝 1998 『会話の人類学—ブッシュマンの生活世界(2)』 京都大学学術出版会
- 注31) 前掲書、p146
- 注32) 前掲書、p144
- 注33) ギデنز前掲書、p63.
- 注34) クライマン, A.1992 『臨床人類学—文化のなかの病者と治療者』、(1991「近代化のエージェントとしての出稼ぎ—弘前児童相談所資料を手がかりにして—」、文経論叢第26号3号,pp79-13.) 弘文堂.
- 注35) Giddens,A. 1991 Modernity and self-Identity : Self and Society in the Late Modern Age. Stanford University Press, p340. 以下MSと略記。
- 注36) Gergen, K.J. 2000 The Saturated Self : Dilemmas of Identity in Contemporary Life (2000 edition), Basic Books, NY.

- 注37) MS, p189
- 注38) アンダーソン、B.1987『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』 白石隆・白石さや訳、リプロボート。また、川村邦光は『オトメの身体—女の近代とセクシュアリティ』（1994、紀伊國屋書店）で大正期の乙女たちの投書による共同体を分析している。
- 注39) プラマー、K.『セクシャル・ストーリーの時代—語りのポリティックス』、桜井厚、好井裕明、小林多寿子訳、新曜社 p43.
- 注40) 『日常』、p257.「現実維持の最も重要な媒体は会話」。
- 注41) プラマー前掲書。
- 注42) 『がん患者学—長期生存をとげた患者に学ぶ』（柳原和子、晶文社、2000）は、がん患者というアイデンティティをめぐる記録として読むことができる。同著書をテーマにしたテレビ番組がETV2001（NHK教育）で放送された。以下内容を記す（NHKホームページより）。黙って身体的・精神的苦痛に耐えてきたがん患者がカミング・アウトする。
- 6/18（月）放送 第1回「私はこうして5年を生きた」：出演 柳原和子（ノンフィクション作家）：患者はどんな思いで医療を受け、生きているのか。それを知ることががん医療のあり方を考えるうえで最も大切なことだと柳原さんは言う。長期生存を果たした患者たちへのインタビューを重ねた著書「がん患者学」はその第一歩だった。シリーズ第1回では再び柳原さん自らが長期生存を果たした患者たちを訪ね日本のがん患者が何に悩み、どういう医療を自ら実践してきたかを明らかにする。また患者団体に対して全国規模のアンケート調査を実施、患者のがん医療に対する意識も見ていく。
- 6/19（火）放送 第2回「がん医療・新たな潮流」：出演 柳原和子（ノンフィクション作家）：去年、四国がんセンターが全国で初めて入院患者に対して行った「代替医療」の実態調査によると、3割の患者が何らかの代替医療を行っていることが分かった。欧米では国家的なプロジェクトとして「代替医療」の研究に本格的に取り組み始めている。
- アメリカ・NIHは「西洋医療は感染症や外傷の治療には効果的だが、がんなどの慢性病には不得手である」と西洋医療の弱点を認め、病気の予防や患者の生活の質（QOL）の向上に効果があるとされる代替医療に活路を見出そうとしている。国立代替医療センターを設立、年間6800万ドルの予算を投じて研究をスタートさせている。抗がん剤治療の場合も、入院でがんを攻撃するというものから、外来通院でがんを抑えながらQOLを維持するものが主流となっている。番組では大きなパラダイム転換が起こっているアメリカのがん医療の最前線を見つめる。
- 6/20（水）放送 第3回「サバイバーが社会を変える」：出演 柳原和子（ノンフィクション作家）：毎年5月の第二土曜日、ロサンゼルスに全米から長期生存を果たした乳がん、卵巣がんの患者が集結し行進をする。その数は5万人。サバイバーと呼ばれる女性たちは互いの生存を確かめ合い、寄付金を集めがん医療の研究のために貢献する。サバイバーたちは自らサポートグループを立ち上げ、患者の心のケアなどに取り組むだけでなく、抗がん剤などの新薬の早期認可を政府に働きかけるなどがん医療、そして患者を取り巻く社会のあり方まで変えていこうとしている。21世紀の新薬として期待される乳がんの遺伝子治療薬ハーセプチンの認可をわずか半年で可能にしたのは患者たち自身の活動だった。アメリカのサバイバーたちの取り組みを通して、これからのがん医療はどう進もうとしているのか、患者の視点から考える。
- 6/21（木）放送 第4回「がん患者からのメッセージ～NHK全国患者アンケート調査から～」：出演 柳原和子（ノンフィクション作家）：今回、いくつかの患者会の協力を得て、大規模ながん患者の意識調査が可能になった。治療についての医師の説明は十分だったか、治療法に納得しているのか、代替医療への関心、がんという病気についての考え方など質問は現在のがん医療について患者自身がどう考えているのか、その全貌を明らかにするものである。シリーズ最終回はこの貴重な調査結果を詳しく紹介しながらスタジオでの議論を中心にこれからの日本のがん医療のあり方を考えていく。
- 注43) 宮本によれば、「生活ないし生命のありかたの選択が、自己と環境、自己と他者、自己と自分自身といった関係の形成方向をめぐる争点になり、それらについてなんらかの問題解決案の決定

- が目指される社会的過程」(宮本孝一、1998 『ギデンズの社会理論—その全体像と可能性』 八千代出版、p109)。
- 注44) M S, p139.「再専有化の結果、素人の信念や実践と抽象システムの領域の間には無数の空間が開かれていてある。ある状況では、時間とその他の必要条件がそろえば、個人は特定の決定をする、あるいはどのような行為をとるかを考えるときに、部分的、全体的な再熟練化を遂げる可能性がある」。
- 注45) 『日常』、p96.
- 注46) ギデンズ (MS, pp214-217)によれば、ライフ・ポリテックスは、解放のためのポリティックスとは異なり、十分に豊かな世界ではライフスタイルの選択をめぐる争いである。また、ライフ・ポリティックスは、環境を構成する存在、人間存在の有限性、生活の個人性と共同性、自己アイデンティティの4つの領域で生じるという。
- 注47) 中河伸俊、1999『社会問題の社会学—構築主義アプローチの新展開』、世界思想社。
- 注48) ギデンズ、『近代』、p101.
- 注49) 拙論 1999 「社会的構築主義から性格をとらえる」、杉山憲司・堀毛一也編著、『性格研究の技法』、福村出版、pp160-169.
- 注50) 松田素二 1999 『抵抗する都市』、岩波書店、pp244-255.
- 注51) 安倍淳吉 1978 『犯罪の社会心理学』、新曜社、p19. ただし、安倍は「個人」ではなく「人格」を用いている。
- 注52) 安倍淳吉 1968『社会心理学』、共立出版(第4刷)。
- 注53) 安倍前掲書(1978)、pp20-21. 「一定場面を把握する場合、一定の時空間的距離において成立し、しかも特定人格を基盤にした生活空間の客観体制をもち、しかも、人格・社会・文化の必然的通路に沿ってとらえる規模」。
- 注54) 拙論 1995 「健康への対処—健康食品の広告分析からの予備的考察」、弘前大学保健管理研究15-2、p36.
- 注55) パー,V. 1997 『社会的構築主義への招待—一言説分析とは何か』、田中一彦訳、川島書店。
- 注56) クラーエ,B. 1996 『社会的状況とパーソナリティ』、堀毛一也編訳 北大路書房
- 注57) Hampson, S.E. 1989 Using Traits to Construct Personality. In D.M.Buss and N.Cantor (eds), *Personality Psychology : Recent Trends and Emerging Directions*. N.Y. : Springer, pp286-293 .
- 注58) Hampson, S.E. 1995 The Construction of Personality. In S.E. Hampson and A.M. Colman (eds), *Individual Differences and Personal*, Routledge, p27.
- 注59) クラーエ前掲書,p85.
- 注60) Potter, J. & Wetherell, M 1987 *Discourse and Social Psychology : Beyond Attitudes and Behaviour*, London : Sage
- 注61) 高橋伊津子 2000『高校教師のライフヒストリーの研究—“教師であること”の語り方』、弘前大学大学院人文科学研究科文化基礎論提出修士論文。
- 注62) 西阪仰 1997 『相互作用分析という視点—文化と心の社会学的記述』、金子書房. クルター、J.1998 『心の社会的構成—ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点』、西阪仰訳、新曜社。
- 注63) William B. Swann, Jr. 1987 Identity Negotiation: Where Two Roads Meet, *Journal of Personality and Social Psychology*, vo.53, No.6, pp 1038-1051.
- 注64) 石井宏典 1997 「語られる共同性—ライフストーリーをよむ」、茂呂雄二編著、『対話知—談話の認知科学入門』、pp175-202.
- 注65) ギャーツの民族誌の課題は、「ある社会、文化、生活様式その他、あるいはその成員、文化を担っている者、その代表者その他の人びとの幾人かとの遭遇を一つの理解可能な関係に導き入れるような仕方では民族誌を書くにはどうしたらよいか」(ギャーツ、C. 1996 『文化の読み方/書き方』、森泉弘次訳、岩波書店、pp207-208)。
- 注66) クライマン、A. 1992 『臨床人類学—文化のなかの病者と治療者』、大橋英寿・遠山宜哉・作

- 道信介・川村邦光訳、弘文堂。
- 注67) クライマン, A. 1996 『病いの語り—慢性の病いをめぐる臨床人類学』、江口重幸・五木田紳・上野豪志訳、誠信書房。
- 注68) ガーゲン, K.J. 1998 『もうひとつの社会心理学—社会行動学の転換に向けて』、杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀訳、ナカニシヤ出版。
- 注69) 土井隆義 2001 「ある「暴力事件」をめぐる記述のミクロポリティックス」、中河伸俊他編『社会構築主義のスペクトラム—パースペクティブの現在と可能性』、pp133-155、ナカニシヤ出版。
- 注70) 杉万俊夫 2000 「住民自治の社会システムをめざして」、『よみがえるコミュニティ』、ミネルヴァ書房、pp29-148。
- 注71) 杉万前掲書 pp61-64。
- 注72) 高橋伊津子 1997 『「不登校」への社会史的アプローチ』、弘前大学人文学部人間行動コース提出卒業論文。
- 注73) 高橋は「メンタルフレンド」として、筆者は嘱託判定員として相談所の活動に参加している。
- 注74) 拙論、1998 「観察法—記述としての「観察」から」、高橋順一・渡辺文夫・大淵憲一（編）、『人間科学研究法ハンドブック』、ナカニシヤ出版、pp87-122。
- 注75) 拙論 2001 「“つらさ”を手がかりにしたフィールド理解の試み—北西ケニア・トゥルカナにおけるフィールドワークから」、『人文社会論叢』（人文科学篇）第5号、pp77-109、および、同年、「トゥルカナといっしょにすごすこと—フィールドワークを支える最小・最大限の前提」、尾見康博・伊藤哲司編著、『フィールド研究の技法』、北大路書房、pp187-198。
- 注76) 木立るり子・作道信介、2001 「語りからみた在宅家族介護者の現実構成」、第6回日本老年看護学会。
- 注77) リクール, P. 1990 『時間と物語—物語られる時間』、久米博訳、新曜社、p448。
- 注78) モンジャン, O. 2000 『ポール・リクールの哲学—行動の存在論』、新曜社、p176。
- 注79) 佐藤郁哉 1992 『フィールドワーク—書を持って街へ出よう』、新曜社、pp22-27。